

## 時間観念の発生に寄せて

山口 巖

### 1. 言語といわゆる「客観的現実」の関係の問題

§1 我々は、日常的に我々を取り巻いているところの客観的現実というものを、通常我々にとって外在的なものと信じて疑わない。そして我々が日頃用いている言語は、この現実に対する一種の模写であり、言語は専ら我々の生活の全般に亘って、日々社会の他の構成員と意思の伝達を計る爲の必須の道具であると考えるのが普通である。

しかしかのヴィルヘルム・フォン・フンボルトが夙に述べているように、言語の機能は単なる伝達のみにあるのではなく、これと並んで極めて重要なのは、その認識の機能であると考えられる。すなわち、我々が我々自身に対して外在的に存在していると信じる「客観的現実」なるものは、実は言語によって構成されたものに外ならないのであり、その意味において「客観的現実」は、いわば言語の働きによって恰も実在しているかのように構成されたものにすぎないと考えられるのである。

§2 こういうと如何にも奇を衒うもの言いと思われようが、フンボルトは次のようにいっている。

言語の創造は人間の内的な必要によって条件付けられている。言語は人々のコミュニケーションという外的な手段であるだけでなく、人間の本性そのものの中に根を持ち、人間がこのことを達成できるのは、個人的な思惟を社会的な思惟と一致させたときだけなのである [55, pp.23-24]。

更に彼は認識と言語の関係について次のようにも言う。

主観ズブイエクティーフ(体)的活動は、思考において、客観オブイェクト(体)を構成する。というのは、どのような種類フォルシュテルンの表象ビルデであろうとも、表象は、すでに現存している何らかの対象を純粋に受動的に静観するものに過ぎない、などとは、とても考えられないからである。感官の活動は、精神の営む内面的な行為と総合的に結びつかなくてはならず、

## 2 山口 巖

しかも、そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう。更にこの表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく。この場合にごそ言語が不可欠なのである。そのわけは、言語において、精神の働こうとする力が唇を破って解放される道が開かれることになり、この精神の力の生み出したものは、自分の耳へと戻ってゆくことになるからである。このようにして、表象は現実の客観性へと移行してゆくのであるが、そうだからと言って、主観性から切り離されてしまうことにはならない。このような過程を成し遂げることができるのは、言語だけである (第十四節)[54, pp.243-244][61, p.61]。

§3 ここに述べられていることを学生に説明するために、筆者は次のように記した [61, pp.61-62]。これは未だ講義ノートの段階であって公刊してはいないが、既に発表が予定されている『類型学研究』創刊号の「動詞時制の一考察」という論文においてこの部分を紹介した。繰り返しになるが『類型学研究』は余り人の目に付かないと思えることと、この説明が学生に理解されやすかったという経験もあり、あえて再録することとする。

フンボルトは、人間はたとえば目の前に「机」があるのを見て、それをそのまま受動的に受け入れて机の概念 (表象) を作るのではない、とっています。ものを見る目、聞く耳、さわる触感などは、精神の活動と一体になって働き、たとえば「ツクエ」という音と結びつけて、はじめて概念を自ら作り上げるのだ、というのです。たとえばスペクトルのような連続した色のばあい、どこからどこまでが「赤」なのか、あるいは「青」なのかを客観的に決めることはできません。

それぞれの民族は自分の国の「赤」に当る言葉と、現実のスペクトルとを対応させて、色の連続に切れ目を入れるのです。ですから言語によって必ずしも切れ目が一致するとは限りません。日本語の場合は昔は「青」と「緑」の間に切れ目を入れず、ひっくるめて「青」という言葉で示していました。しかし一旦こうした「精神の内面的作用」と結びついた視覚によって、たとえば「青」という言葉に対応する概念が確立しますと、今度はそれは、あたかも言語主体とは関係のないもののように、受取られることになります。すなわち、「そこに生れた表象はこうした結びつきから自己を解き放ち、主観の力に対立して、それなりに対象になってしまう」のです。

そうすると、たとえば「青」という概念は、現実に見るものがこの概念に当てはまるかどうかという物差になります。「青」であるとか「青」ではないとかいうように、これを基に現実にあるものを、主観的に判断をするようになります。「この表象は、今度は新しく対象として知覚されつつ、主観の中へと還帰してゆく」というのはこのような意味だと思われます。

つまり、フンボルトは、ここでは言語というものは、客観世界をそのまま写し取るものではなく、言語毎に客観世界をいわば「切り取って」、それぞれに異なる「客観世界」を作り出すのだ、といているのです。そしてこれが「主観(体)的活動は、思考において、客観(体)を構成する」ということの意味なのだ、といているのです [55, p.61]。

§4 これをもう少し敷衍するために、著者は学生に対して更に次のように説明した。

さらにいえば、例えばここに「この道の所々にはほぼ一定の距離において椅子が配置されていて、道を行く人が歩き疲れるといつでも腰を下ろして足を休めることができる」というような文章があるとしましょう。この文章は誰でも理解でき、直ぐに情景を想像することができます。しかし本当にそうでしょうか。例えば今ここに木で作られた椅子があるとします。しばらく行くと今度は岩を削って座れるようにした椅子があります。さらに行けば今度は鉄製の椅子が見えてきます。大理石でできているものもあるかも知れません。しかし客観的に存在しているものは、「木」であり、「岩」であり、「鉄」であり、「大理石」であるに過ぎません。「椅子」なるものは客観的には存在してはいないのです。それにもかかわらず私たちは先ほどの文章から、あたかも「椅子」が客観的に存在していると思ってしまいます。これはどうしてでしょうか。

実は「椅子」というのは客観的な存在に対して与えられた名前ではなく、その用途ないしは機能に対して与えられたものにすぎないのです。(機能が実在するものでない以上、これに対する名前である「椅子」なるものが実在するはずはありません。) 言い換えれば、これらの実在する「木の塊」や「鉄」や「岩」などは機能の点で等質なものと観念され、したがってあたかも「椅子」が客観世界に実在しているかのように思いこみ、その結果先ほどの文章の意味が理解されることになるのです。従って熊であれ兎であれ、機能を理解できないものには、それらの「椅子」はすべて相異なるものとししか認識できないでしょう。

このようなものは言語に関して無数にあります。私たちが客観世界であると信じているものは実は精神活動の結果そう信じているに過ぎないものなのです。従って極端に言えば、私たちを取り巻いている「客観」なるものは決して同一ではなく、言語が異なる毎に異なっているということもできます。実はこのような考え方は、最近問題にされてきている環境言語学の理論的な鍵となるものだ、と考えられます [61, p.61& seq.]。

§5 この考え方は、この論文の鍵となる重要なものであるから、こういう考え方に慣れていない人のために、聊かくどいかも知れないが、鳥取環境大学の

#### 4 山口 巖

定年講義で述べたことを繰り返しておきたい。

(これは「椅子」のように実在するものの機能に与えられた名前と異なり) 全く存在する筈のないものにさえ私たちは名前を与え、あたかもそれが存在するかのように信じ込む場合もあります。その典型的なものに、「欠如詞」といわれるものがあります。最も普通なのは「穴」です。既にお分かりと思いますが、これは連続して存在していると期待される物質が、あるところで欠如したものに与えられた名前に外なりません。それなのに私たちは「穴」という言葉があるために、「穴」なるものが現実に存在していると信じ込んでいるのです。そればかりではなく私たちは「穴の形」などという、存在しないものの形についても口にして怪しまないのです。滑稽なことと申せましょう。その欠如の方向が比較的レベルであって、人や動物が入ることが出来るものは「洞穴」になります。「崖」もそうです。英語で There's nothing. 即ち直訳すれば「そこに nothing がある」というのもこれに当たりましょう。

行為に関しても同じことが言えます。たとえばここに「お父さんは机に向かって手紙を書き、お母さんは火鉢の側で着物を縫っています」という文があるとします。この情景は誰にでも理解でき、現実に存在していると感じられます。微笑ましく、平和な家族の生活が思い浮かべられることでしょう。今ここで先に述べたように「机」や「火鉢」、「手紙」や「着物」が実在しないということもありますが、「手紙を書く」あるいは「着物を縫う」という言葉もよく考えると奇妙なことです。なぜならば「手紙」というのは「書いた結果」できて来るものですし、「着物」なるものも「縫った結果」できるものですから、「書く」あるいは「縫う」時に先だつては未だ存在していないはずで、これを「結果の意義」と申しますが、不思議なことにほとんどの言語では「結果」の意義は行為の時には未だ存在しないにも拘わらず、目的語になって行為が及ぶ対象として表現されます。「作る」という行為などはその最たるものと言えましょう [63, pp.23-24]。

#### 2. 言語における時間の問題

§6 もしも客観的に存在すると思われた周囲の空間的な世界においてすら、その存立が専ら言語に依存しているとするならば、時間のみが言語から独立して存在するということには、深い疑念を呈しない訳にはいかならないと思われる。勿論このことは、時制を持たない言語を用いる民族が「時間的な観念」を全く持っていなかったと主張するものではない。現に印欧語のような時制を発達させなかった日本語、乃至中国語などを話す民族が、過去、現在、未来を区別できないなどということはあるに得ない。むしろ多くの言語はアスペクト、モードゥスのような、より感性的な方法を用い、文脈によって行為 (乃至は状態) を時間

の軸の中に定位しても、何等の不便をも感じてはいないのである。

逆に英語、ドイツ語のような言語ですら、モードゥスの助けを借りずに例えば未来を表現しえているとは考えられないであろうし、また複雑な時称体系を構築した古典ギリシア語において、例えば動詞未来形が、純粹に行爲を未来の平面に投射しているとも考えることも難しい。

もしそうであるとすれば問題は、それぞれの言語を話す主体において、あれこれの事象の生起を、一定の形式を用いることによってそれぞれ時間軸の上に正しく配置し得ているという、「意識」が存在しているか否か、またどの段階でそう意識されるようになってきたのかということにならざるをえない。

§7 ここであり得る誤解を避けるためにいうとすれば、大凡次のようになろう。時称体系を発達させた言語の場合、あるいは時間を様態、乃至はアスペクトなど時制以外の手段を用いて表現している言語の場合、それぞれの時間のとらえ方、あるいは意識の仕方には相異があるであろうと考えられる。それは言語によって、空間における客観世界の構築の仕方が異なるということと同じく時間的にも言語による構築の仕方が異なるという問題であり、決して言語の優劣の問題ではない。

従ってここで述べようとするのは、突き詰めていえば、言語外的な「客観世界」の言語による構築という考え方を、空間的なものから時間的なものへと拡張しようという試みの一つに外ならない。

比較言語学者も言語、特に印欧語族の言語が、そのそもそもの始めから時間を表していたとは考えていなかった。例えば著名な印欧語比較言語学者のヒルトも、時間に関して次のように述べている。

Es gab im Idg. drei verschiedene <<Verbal>> Stämme, den Präsens-, den Aorist- und den Perfektstamm. Diese haben anfänglich nicht die Zeit, sondern etwas anderes bezeichnet. . . . . [10, III, p.118]

§8 先に言及した筆者の論文においては

- (1) 印欧語の所謂一次語尾と二次語尾の機能的関係 (「二次語尾」が起源として初原的な形であったことは既に諸家の認めるところである) および

- (2) 諸家の認めるように、最も単純な零階梯の母音度をもつ語幹 (所謂アオリスト語幹) に所謂二次語尾が付加されたものが初原的な状態であるとした場合、所謂時称を表す要素が、これよりも時間的に早く語幹に接続していた人称語尾と語幹との間に挿入されたのは何故か。
- (3) ヴェーダの言語、アヴェスタの言語、あるいはホメーロスのギリシア語において所謂 augment を欠き、二次語尾を持ちながら一定の非直説法的な機能を以て使用されたとされる、所謂 injunctivum についての若干の問題点。

の三点について述べた。

ここで考えようとしているのは、時間の観念を表す形式がどのような契機によって発生したのかという問題であるから、専ら動詞時制の形態的な面を主としながらその機能を取り扱った『動詞時制についての一考察』に対して、ここでは時制の発生を誘発したのではないと思われる現象に焦点を当てたいと考える。それ故議論を進める爲には、どうしても先の論文との一部重複を避ける訳にはいかない。特に断っておきたい。

### 3. 「無限態」としてのアオリスト

§9 周知のようにアオリストというのはギリシア文法において通常過去の行為を端的に述べる動詞の時制に与えられたものである。しかしアオリスト ἀορίστος は本来「境界 (ὅρις 「境界、限界」) の派生語で、「境界を持たない、限界のない」を原義としている。

またこれが過去時に属する行為のみを表したものでないことは明らかであり、古典ギリシア語においても、未だ汎時的な意味で広範な使用を見ていたことが報告されている [23, pp.431-433][62, pp.332-335]。「一般的真理」を表現するという、いわゆるグノーミック・アオリストは有名であるが、スミスによればこれを含めてアオリストには次のような使用が見られるという。

- (1) 経験のアオリスト empiric aorist. 「しばしば」、「いつも」、「時々」、「既に」、「未だ」、「決して」などの副詞を伴って経験される事実を表すとされ

るもの。例えば、

πολλοί πολλάκις μειζόνων ἐπιθυμοῦντες τὰ παρόντ' ἀπώλεσαν. 「多くの  
人々はより大きなものを望んで持っているものをしばしば失うものだ。」

- (2) 諺のアオリスト gnomic aorist. 一般的真理を表すとされるもの。例えば  
κάλλος μὲν γὰρ χρόνος ἀνήλωσεν ἢ νόσος ἐμάρανε. 「美は時間が損なうか  
あるいは病が萎れさせるものだ。」

- (3) 反復のアオリスト iterative aorist. 反復される行為を表すもの。ἄν を伴  
う。例えば、  
εἶπεν ἄν 「彼はいつも言うのだ」

- (4) 比喩のアオリスト aorist in similes. 詩において比喩として使われるもの。  
例えば、  
ῥιπε δ' ὥς ὅτε τις δρυὺς ῥιπεν. 「彼は樅の木のように倒れた。」

- (5) 未来を表すアオリスト aorist for future. 未来のことを生き生きと表す場  
合。例えば  
ἀπωλόμην ἄρ', εἰ με δὴ λείψεις. 「もしお前が私を見捨てるならば、私は死  
んでしまおうだろう。」

- (6) 現在を表すアオリスト aorist for present. τί οὖν οὐ または τί οὐ を伴って  
驚きを表し「どうしてしてくれないのか」という意味を表す場合。例えば、  
τί οὖν οὐχὶ καὶ σὺ ὑπέμνησάς με· 「どうしてお前は私に言ってくれない  
のだ。」

- (7) 現在完了を表すアオリスト。過去の行為の結果としての現在の状態を表す  
もの。例えば、  
παρεχάλεσα ὑμᾶς, ἄνδρες φίλοι. 「友よ、私があなた方を呼んだのだ。」

§10 以上に上げた用法からも明らかなように、アオリストは過去に生じた  
事象を述べるというだけではなく、現在の事件も、未来の事件も、また汎時的  
な一般的真理に属する事柄をも表現し得た。

この機能はアオリストの構成に既に現れているように思われる。ギリシア語のアオリストは *e-* を前置するが、これは周知のように *augmentum* と呼ばれ、過去時に属することを表すものとされている。したがってこれは行為の過去における継続を表すとされる未完了過去にも (*ἐ-παίδευ-ον* 「私は教えていた」)、完了過去にも (*ἐ-πεπαίδευ-κην*)、またその中・受動形にも前綴されていた。

*augmentum* はギリシア語及びサンスクリットなどのアーリア語派において用いられていたが、本来は独立の語であったといわれる。セメレニイはこれについて次のように述べている。

That the augment was originally an independent word, presumably an adverb, can among other indications be inferred from the fact that it carries the accent and consequently the verb is treated as an enclitic; its meaning was perhaps 'really' or 'formally', 'once' or local 'there' or both together 'illic et tunc'; at any rate it was not a conjunctive particle [25, p.297].

ギリシア語の *augmentum* もしたがって比較的后になって過去の指標として用いられたと考える。セメレニイはこれに関して更に次のように述べている。

In the early writings of Greek and Aryan, which are all verse, the use of the augment is optional; in prose, on the other hand, it is compulsory from the beginning (*ibid.*).

ただしここで彼が *it is compulsory from the beginning* と時間の限定を全くつけていないことには留保の要があろう。いずれにしても既に述べたように、アオリストが過去の指標たる *augmentum* を伴っても、なおかつ完全には行為を過去時に定位し得なかったというのは、著しい現象というべきであろう。

§11 アオリスト語幹の形式は基本的に零階梯の母音度を持っている。現在語幹は主として E 階梯であって、例えば *\*bheug-* > *φεύγ-ω* 「逃げる」に対するアオリスト形は *\*bhug-* > *ἐ-φυγ-ον* のようになる。これは何らの修飾も加えない裸の語根といえよう。言い換えれば、これは語の意義をそのまま表現する語根の形とも言える。

例えば、

**\*bhudh-** R. *बुध-и-त*; OCS *бѣд-ѣ-ти* 「起きている」; Skr. *buddha* < *budh-ta*

「目を覚ました、悟りを開いた、仏陀」

**\*bheudh-** R. блюд-ет; OCS блѹд-ѣт 「見守る」; Skr. bodh-a-ti 「目覚めている (現在)」

**\*bhoudh-** R. буд-и-т; OCS бѹд-ит 「起こす」; Skr. bu-bodh-a 「完了」

§12 メシチャニーノフは名著『動詞』において、ネネツ語の述語が1・2人称において名詞、形容詞、動詞に関わりなく述語の内容に密接に関わる対象の接辞を付加するが、それ以外(3人称)においては接辞をつけないことを示している[45, p.45]。

|                 |        |                  |         |             |           |
|-----------------|--------|------------------|---------|-------------|-----------|
| <i>хасава-м</i> | 私は男だ。  | <i>нгарука-м</i> | 私は大きい。  | <i>ну-м</i> | 私は立っている。  |
| <i>хасава-н</i> | お前は男だ。 | <i>нгарука-н</i> | お前は大きい。 | <i>ну-н</i> | お前は立っている。 |
| <i>хасава</i>   | 彼は男だ。  | <i>нгарука</i>   | 彼は大きい。  | <i>ну</i>   | 彼は立っている。  |

名詞においてもこのような「人称語尾」がつくとすれば、これは現代語の感覚でいうところの「人称語尾」というよりは、これを述語の標識であると考えの方がむしろ妥当であろう。メシチャニーノフもまたそう考えているようである。

§13 メシチャニーノフはこの形をアオリストと呼んでいるが、これは既に述べたように、アオリスト α-όριστος の原義「無限態」によったものであろう。

彼はこれについて「アオリストはいかなる時間の標識も持たないが、過去形は独自の標識を持ち、述語に立つ動詞あるいは名詞は人称の標識と結びついてひとつの動詞語尾を形成する」(op.cit., p.46)と述べている。彼によれば過去形は次のようになる。

|                     |           |                   |         |
|---------------------|-----------|-------------------|---------|
| <i>нгарука-мзъ</i>  | 私は大きかった。  | <i>сюрби-мзъ</i>  | 私は走った   |
| <i>нгарука-нась</i> | お前は大きかった。 | <i>сюрби-нась</i> | お前は走った。 |
| <i>нгарука-сь</i>   | 彼は大きかった。  | <i>сюрби-сь</i>   | 彼は走った。  |

ここでアオリストあるいは過去とっているのは、真正な時制のカテゴリーではない、とメシチャニーノフは述べている。即ち

このネネツ語においては、動詞のみでなく名詞も述語の位置においてアオリストと過去という、この言語が所有する二つの時制に従って変化する。しかし後に見るように、これらは我々が持っている時制の区別というものに完全に対応するもので

はない (op.cit., p.46)。

.....

サモジー諸語<sup>1</sup>においては、すべての種類の動詞に共通の二つの時称しか区別しない。これらの言語で過去時と呼ばれているものはその内容からアスペクトに近いニュアンスを持っている。もう一つの時制であるアオリストとは反対に、それは遙か以前に生じたか、あるいは遙か以前に生じつつあった行為を伝える。従って過去時は体験される行為の過程という内容を失う。それは既に終わった行為である。一方過去に生じた事件を行為の過程において観察する際には、通常アオリストが用いられる。それはそれ自身いかなる時間的な内容も持たない。例えばネネツ語の *вэсако тым хада* 「老人・鹿を・殺した」、*тым хада-м* 「鹿を・殺した・私が」などである。これらの例に見られる動詞 (*хада*, *хада-м*) は「殺す」という意味にも、「殺しつつある」及び「殺そう」の意味にも用いられる。この場合時間的意味は、現在も未来も表すことのできるアオリストそのものによってではなく、文脈全体あるいはこれに伴われる時間の副詞によって伝えられるのである。

一方もし話者が遙か昔に行われた何らかの過去の事実の確認にとどまるならば、即ち、彼にはそれが既に静的な状態として把握されているならば、以前に行われたか、あるいは行われつつあった事実を伝え、行為そのものの経過を伝えるものでない過去形が用いられる。曾てあった事は既に完了し、「冷えてしまった」 *застывшее* ものと認められているのである [45, pp.76-77]。

引用から明らかなように、メシチャニーノフの主張は、これらの言語においては、時称はかつては「アオリスト」と「過去形」の二つであり、「アオリスト」は過去、現在、未来の何れの事件をも表すことができること、また「過去形」は伝聞など話者が実際に経験したものではない(即ち目撃性のない)事件を表すものであるというところにある。

§14 最近の印欧語比較言語学においても、印欧祖語の初原的な状態に関して、これとよく似た構造があったという観方が一般化しつつある。ロシアでこれは夙にトロンスキーが主張したところであった。

現代の多くの研究者の意見によれば、動詞組織の現在・アオリスト部分の最古の層にあったのは、現在語幹あるいはアオリスト語幹に直接二次語尾を付けて造られた形式であって、いわゆる *injunctivum* の機能を以てヴェエダやアヴェスタにみられるものである。二次語尾は一次語尾より古いものと考えられるから、(この形は)後の時代になって一次語尾が同じ語幹に加えられてできた現在形よりも、古いもの

<sup>1</sup>サモジー諸語はシベリアに住む少数民族ネネツ、エネツ、ンガナサン、セリクプの言語がこれに属している。

である。現在形が作られ、アオリストと区別されるまでは、いわゆる *injunctivum* といわれるこの形が行為動詞の唯一のものであった。これに対立する可能性のあるものは、……完了形と中動相の先駆となる状態動詞の形だけであった。

Schwyzler が *Primitiv* (原始形) と呼ぶところの行為動詞の初原的な形は、アスペクト・時称及び法のすべての分化に先立つものである。*\*-i* が *\*-m*, *\*-s*, *\*-t* などの語尾に付加されたときにはじめて、「原始形」と並んで後に現在形の機能を持つことになる形が作られ、現在と *injunctivum* という二系列の形式の対立が発生するのである。

この対立について論じるためには、ヴェーダ及びアヴェスタにおける *injunctivum* の独特な意味を、考慮しなければならない。*injunctivum* は文脈においてのみ区別できる多くの意味を持っている。それは禁止の場合に用いられるなど、相の形式の役割を果たすこともできると同時に、過去だけでなく、現在すら特に何らの時間的制約をも受けることなく、常に、行われる行為の現在を表すことができる。

このことは *injunctivum* と対立関係にある現在形というカテゴリーの初原的な意味を明らかにする。これは「眼前にある」現在、*hic et nunc* の現在であり、*\*-i* という要素を付加することにより、明らかにこの行為の眼前性 *наличность* を卓立するのである (cf. ある種の非印欧語の「目睹法」*очное наклонение* と「非目睹法」*заочное накл.* の区別 [49, p.94])。

§15 トロンスキーがここで注として挙げているのは、ルヌー [19, pp.63-86]、クリロヴィチ [15, p.164]、ゴンダ [9, pp. 33-46]、シュヴィーツェル [24, p.645] の諸論文であるが、トロンスキーの言う「眼前性・非眼前性」と、メシチャニーノフが述べている「ある種の非印欧語」がもつ過去の「目睹性」という目睹性・非目睹性とは原理的に少しく異なっていると考えざるを得ない。即ち、トロンスキーが述べているのは、彼のいう「状態動詞」に対立する行為動詞の内部における眼前性と非眼前性であるが、メシチャニーノフが言っている「非目睹性」はアオリストと対立する過去形について言っているのである。そしてこの「過去形」は目睹性を持たず、したがって伝聞に属する事項の表現であるから、それは「冷えてしまって」行為性を失い「状態と同じ」になっているものを指しているとみるべきである。そうすれば、メシチャニーノフのいう「過去形」とは「完了形や中動相の先駆となる形式」、即ち状態動詞の形であるということができる。さらに言えばこれは印欧語が未だ活格言語であった時代に、生物と無生物という基本的な分類による名詞に対応する動詞の類別であるとされる、ガムクレリゼ・イヴァーノフが主張するところの、いわゆる *\*-m(i)* 動詞と *\*-Ha*

動詞にその淵源を発する類別に繋がるものということになろう [36, I, p.291 & seq.]。

もしそうとすれば、両者の主張の間には実質的な違いは何もないことになる。片や状態動詞と行為動詞の現在及び injunctive、片や過去形に対して現在にも過去にも用いられるアオリストの対立ということになるのであって、用語こそ異なれ、実質的な相異はその間にはないように見える。

§16 しかしながら、このことに問題が全くない訳ではない。イヴァーノフは、次のように述べている [38, p.8]。

完了形 (の成立) が印欧語諸方言のそれぞれのグループにおける革新によるもの (Иванов 1963; 1965; 1968, Van Block 1964) で、ヒッタイトの *-hi* に終わる変化の祖形と共通したものであるという仮説は、mediopassive と共通の祖形とは区別しようという傾向は見られるものの、近年、すべてではないにせよ多くの研究者によって受け入れられている (Risch 1975 p.250[20], Eichner 1975 p.25[8], Cowgill 1975[6]; 1979[7] p.27)。

また彼は同じく次のようにも述べている (*op.cit.*, p.7)。

*-hi* 変化と完了の関係を扱った以前の論文において、ローゼンクランツはヒッタイト語の *-hi* 変化と他の印欧諸語の中動相形式諸相動詞 medial deponent verbs の変化が、意味的に強い類似を示していることを示した [22]。

ローゼンクランツのこの研究、およびクリロヴィチの一連の仮説から導かれる重要な帰結は、ギリシア = アーリア方言地域において知られている形を持った完了形が、時代的には後の性格のものであることを容認するものであった。

同じ結論は、印欧語の完了形と比較したアナトリア語の重複をもつ動詞の研究によっても、裏付けられた (Van Block 1964[2])。

即ちイヴァーノフは印欧語の最も深い層において、即ち未だ印欧語が活格言語であった時代に、生物と無生物の原理にしたがって動詞も二つの種類、即ち *\*-m(i)* 変化と *\*-Ha* 変化に分かたれていたこと、そして *\*-m(i)* 変化は生物に対応していたために行為も状態も表し得たのに対し、*\*-Ha* 変化は無生物に対応していたために状態のみを表していたことと考える。これは現在印欧比較言語学において通説と考えられるものであり、内容的類型学の結果と一致している。

また活格言語は述語が文の中心であり、行為者を表す活格に対して無徴的な

絶対格は、述語の修飾語に近い位置と役割を占めるに過ぎない。したがってそれはある場合には行為の論理的な目的語となり、またある場合には述語の示す状態の乗輿を表すことになる。この論理的帰結として *\*-Ha* 変化は、これを伴う絶対格名詞に対し、その状態を示すかあるいはこれが単なる関与者であることを示すことになる。

そうすれば無生物に対応していた *\*-Ha* 動詞の場合、やがて生物に関してその状態を表すか、あるいは生物を単なる関与者とする述語に発展することも論理的に可能と考えられる。前者がやがて完了を表すようになり、後者が中動相として用いられるのもごく自然な成り行きということになる。

もし前者が行為の結果としての状態を表し、後者が単なる関与者であった対象を行為を蒙るものとするようになったとき、即ち受動の意味を獲得したとき、活格言語の論理は崩壊し、対格言語の論理がこれに代わることになる。

しかしもしそうとすれば、対格言語の場合、前節で見たような「非目睹性」によって区別される「過去形」なるものの居場所がなくなってしまうという問題が、新たに生じることになる。

#### 4. 「二分類型 (二時称型) 体系」の問題

§17 先に述べたように、サモジー諸語などにおいては、古くには「アオリスト」と「過去形」の二つの時称を区別するのみであったとメシチャニーノフは述べている。そしてこの体系は前節で述べたように、印欧語の古層においても同じく認められると考えてよい。したがってこれに「時称」という名称を当てるのは誤解を招くと思われる。適当な用語のないまま、これを仮に「二分類型体系」というとすれば、これはメシチャニーノフも認めているように、「真正な時称体系」とは言えないのは明らかであり、更にこのことは「アオリスト」が時間的には現在時にも、過去時にも、また未来時にも、いわば汎時的に使用することができるという一事からも明らかである。これに対していわゆる「過去形」は「既に完了し、冷え切ったもの」を表すとされる。もしそうとすれば過去形は最早「行為」ではなく単なる事実を表すものに外ならないであろう。この過去形が印欧語の無生物に関わる *\*-Ha* 動詞と平行するものであることは既

に指摘した。印欧語の古層においてこの過去形が無生物に関わるものとすれば、それは行為を表すものでなく、状態を示すものに外ならなかった。このような区別を持つ言語がいくつの形式を立てるかは別として、これらが時称を表すものではなかったという認識においては、印欧語に関するヒルトの考えと異なるところはない。

§18 この記述は、図らずも細江逸記のいうところの「傳承回想」に重なっていると思われる。細江は名著『動詞時制の研究』において英語の過去形を「回想叙述」の形式としながら、その中に話者が実際に見聞した「目睹回想」とそうでない「傳承回想」という重要な区別が本来存在していたという。

「... 現代英語に於いては單なる『回想叙述』の場合に、語形上経験と非経験の區別はなくなって仕舞ったが、Old English の時代にはまだ或程度までは其區別が残って居た」[59, p.135] と述べ、この区別はトルコ語において Maziyi Shouhoudi (= Eye-Witness Past) と Maziyi Naqli (= Reporting Past) の區別に対応しているという。即ち、「例を挙げると英語で同じく “He lived” といふのでも言者が其事實を目睹して確信して居る場合であれば土耳其人は “Maziyi Shouhoudi” を用ひて o yashadi と言ひ、只他よりの傳聞に過ぎない時は “Maziyi Naqli” を用ひて o yashamish と言ふのである。」(ibid.)

§19 細江はこの区別はドイツ語には或程度残されているという。

此區別は獨逸語にも或程度まで存在し、

Sie waren gestern in der Oper.

(= You were in the Opera yesterday.)

Sie sind gestern in der Oper gewesen.

(= You have been in the Opera yesterday.)

といふ例が Wetzel の *Die Deutsche Sprache*, p.153 及び Curme の *A Grammar of the German Language*, p.213 に出て居る。前者は “Maziyi Shouhoudi” に属し、Wetzel はこれに “als der Sprachende da war und den Angeredeten sag” ..... と説明し、後者は “Maziyi Naqli” に相當し、氏は “so hört der Sprachende von anderen” と註釋を加へて居る。(op.cit., p.136.)

細江は更にこの区別は日本語にもかつて存在していたと主張し、「目睹回想」としての「き」と「傳承回想」の「けり」について言及しているが、これについては専門家の見解を俟つとして、ここでは単に事実を述べるにとどめたい。

§20 「二分類型体系」でなく「多分類型体系」におけるいわゆる「過去形」、若しくはむしろ「前過去形」とでもいうべきもの、の意味については別に考察の要があるが、少なくともメシチャニーノフのいう「二分類型体系」における「前過去形」の機能は、細江が言うところの「傳承回想」に当たるものと考えられよう。

「二分類型動詞体系」と時間との関連については、メシチャニーノフは次のように結論づけている。

明らかに人称も時称も動詞特有の性質と最も密接に関わるものではない。未ださほど遠くない過去においてこの二つはアスペクトと共に文肢を特徴づけるものであった(フォークロアの資料を参照のこと)。後になって法や相を表す指標によって統語的に伝達される行為の色づけが動詞を独立のものとして分離させたとき、一方では名詞の意味的な種別を表す諸要素から、また他方では上述した人称や時間の指標など述語がもつその他諸々の指標の中から、(それぞれ — 引用者) 分離してきたアスペクトもこれに加わって、既に述べたような独立の形式を持つようになったのである。言語構造がこのような状態にあるときには、未だ時間は動詞のカテゴリーにはなっていなかった。行為をそれが行われる過程と関わりなく伝達する汎時的なアオリストと過去の場合、時間の指標はむしろ時制の体系化を指向する萌芽として現れるに過ぎないのであって、これが既に成熟した形で存在していることを示すものではない。この場合時制による変化はずっと後の現象であり、主として動詞の内部で発達するものである[45, p.82]。

## 5. 非印欧語に見られる二分類型体系の残喘

§21 今のところ以上述べたことを直接検証するすべはないが、いわば「状況証拠」として、未だ対格言語の段階には達していないか、若しくは完全には対格言語に移行してはいない言語の状況を観察することは有益であろう。しかしこれは筆者の手には余ることである。

したがって、直接の知識はないとしても、これまで参照したメシチャニーノフの研究のように、この種の言語についての記述があれば、これを参考にすることは有益であろうと思われる。例えばロシアには数多くの少数民族が存在しており、これについての記述も存在しているからである。しかし実際にこれらの著述を見てみれば、事柄はそんなに都合がよく運ぶものではないことが、直ちに判明する。その理由は明らかである。第一にメシチャニーノフの場合は、著

者がたとえ完成した形ではなくとも既に充分な類型学的な立場に立っていたのに対して、これらの著述は依然として古い形の研究乃至叙述の段階を出てはいないと考えられるからである。

§22 例えば二十世紀初頭迄のロシアにおける非印欧語の記述は、丁度十八世紀の日本語の記述のように、ロシア語乃至印欧語の体系にそのまま当該の言語事実を当てはめた記述となっていることが多い。例を挙げれば、ロシア極東における少数民族の一つである朝鮮族の言語についてソヴェト崩壊後に出版された『エンサイクロペディア、ロシア連邦及び近隣諸国の言語』[30]の記述を見れば、名詞は「基本形」を除いて実に八個の格変化を持っているのであり、時称は「現在」、「過去」、「前過去」、「未来」の四個を所有していることになっている。これは1728年に薩摩を出航し、1729年にカムチャツカに漂着した権左(ゴンザ・ポモルツェフ)をインフォーマントとして造られた日本語の(正確には薩摩方言の)『簡約文法』*Краткая грамматика*に較べても、別段の進歩は見られない[56]。『簡約文法』においては日本語(実は薩摩方言)の名詞は、単数・複数にわたって実に六格の変化を行っているのである。

第二に、ここに記述されている各言語を見れば、これは内容的類型学についての知識を持たない人々の記述を集めたものと思われ、時称の名称もまちまちであり、かつ説明も極めて簡単で、どのような機能をもつ形式であるのか、充分には分からない。例文も極めてわずかである。

§23 それにも拘わらず、このエンサイクロペディアの刊行に見られるような資料の蒐集の意義が決して小さいものではないことは、特に述べておかなくてはならない。ここに含まれている大量の資料は話し手の極めて少ない少数民族の言語を多く含み、したがってこれを記述する研究者は極めて稀な場合が多く、時間的にも十七世紀後半以降に限定されているからである。一般的に記述の方法ならびにその内容は、それぞれの時代の学問的水準に大きく影響されるものであるから、それがたとえ今日の学的水準に徴して不十分であったとしても、それは決して責められるべきものではない。むしろ記述されたことによって、これらの言語についての知識が忘却の淵から救い出された倖せを思うべきであろう。その記録の中から何をどのように引き出すかは、一にかかって現在の我々の

責任に存していると考えられる。序でに言えば、簡単ではあるがここに付されている各民族及びその言語についての調査の歴史の概要は極めて価値が高い。

このような問題点を包蔵しているにもかかわらず、ここに記述されている資料によって動詞の組織体系を仔細に見較べれば、臆気ながらではあるにしても、一定の貴重な情報を得ることは可能であるように思われる。以上に述べたような制約を持ちながらも、ここから得られる事柄について、気の付いたことを若干述べてみたいと思う。

§24 上述のエンサイクロペディアによれば、東方平原マリ語 Марийский луговосточный язык では、動詞は直説法において単一形、即ち分析的な形でない時制は「不定時称」、「第一過去」、「第二過去」に分かたれるという。また「第一過去形」は未完了の行為でかつ事件乃至一連の事件を表す場合に用いられるとする。一方「第二過去形」は「通常発話以前に完了し、その結果から話者が行為が行われたと判断できる場合」に用いられるという。この基準を著者は「完了であるかないか、明白性 очевидность があるかないか」であるとする。

定義の仕方が極めて曖昧であるが、察するに「第二過去形」は目撃性がなく、事実があったことだけを伝達するという意味で、「不定時称」と共に曾ての二分類型体系を構成していた「過去」を継承したものではないかと考えられる。「第一過去形」については説明も例示もないのではっきりしない。

これは曾てチェレミスと呼ばれていたマリ族の一部を構成する人々の言語であり、フィン・ウゴル語族に属している。

§25 更に同じくフィン・ウゴル語族のフィン・ペルム語派に属するコミ・ジリヤン語 Коми-зырянский язык においても、直説法の単一形において現在形、未来形、第一過去形、第二過去形を区別するという。

ツングース語の一派であり、曾てギリヤークとして知られていたニブヒの言語では動詞は時称接辞を欠く「非未来形」と -н- (アムール方言)、-y- (サハリン方言) などをもつ「未来形」の二時称を区別するという。yf pa-ð<sup>2</sup> 「彼が飲む、飲んだ」および yf pa-ны-ð' 「彼が飲むだろう」という例示から見れば、「非未来形」はメシチャニーノフのいうアオリストで、未来形はこれから析出した

<sup>2</sup>ð' はメシチャニーノフが ð<sub>b</sub> と表記しているもので、叙述の終わりを示すマーカー。

ものと思われる。「願望、意図」を表す行為の様態を示す接辞として *-ины-* (*и'иу ра-ины-д'*) 「私は飲みたい」があることを考えれば、未来形はこの様態から発生したのかも知れない。これに対して二分類型体系の一方をなす過去形は見られないが、この言語はアスペクトも含めた様態を表す接辞を色々持っているようであるから、あるいはそれによって代替しているのかも知れない。cf. 「逡巡」を表す接辞 *-бын'эво-* — *уф чо ху-бын'эво-д'* 「彼は魚を捕ったみたい」、「確信」を表す接辞 *-γутло/-γутли* (アムール方言)、*-бара* (サハリン方言)、cf. *уф чо ху-γутло // ху-бара* 「勿論彼が魚を捕ったとも」 etc. ([30, II])。

いずれにしても、時制の成立については未だ対格類型以前の段階乃至はこれに近い非印欧語の諸事実を調査する必要があると思われるが、これについては専門家の協力と教示を必要としよう。次に述べようとする未来形その他の場合も同様である。

## 6. 未来形の問題

### (1) 概観

§26 前節でニブヒの言語でアムール方言の未来形を表す要素 *-ny-* が「願望、意図」のような「様相」 *modus* を表す接辞 *-iny-* と関係があるのではないかという推測を述べた。セメレニイは最近、古アイルランド語の未来形は *-sw-* から派生したものであり、更にこれは desiderative の接辞 *\*-su-* に遡るという説があるとして、ピサーニ、トゥルネイセン、ウォトキンスに言及している [25, p.286]。彼が例として上げているのは古アイルランド語 *génaid* “will wound” であるが、これは *\*g<sup>w</sup>hi-g<sup>w</sup>hñ-seti* > *\*gignā-se-ti* > OIr. *génaid* であり、この最初の形はサンスクリットの desiderative *jighāmsāti* “wishes to injure” の祖形であるとする (*op.cit.*, p.285)。但しこの形は六個の動詞に限るという。

この古アイルランド語の形が重複を伴っていないためであろうか、セメレニイはこれに続いて、この形は語根がソナントに終わっているためであり、子音に終わる場合は重複を保存しているとして、IE *\*g<sup>w</sup>hi-g<sup>w</sup>edh-s-ti* > OIr. *\*gi-ged-s-ti* > *gigis* “will ask for” という例を挙げている。

ギリシア語のばあい未来は、語根に接辞 *\*-s-* を介していわゆるテマティッ

クな変化語尾を付加することによって作られるのが通例である。例えば現在形  $\pi\alpha\iota\delta\acute{\epsilon}\upsilon\omega$ ,  $\pi\alpha\iota\delta\acute{\epsilon}\upsilon\text{-}\epsilon\iota\varsigma$ ,  $\pi\alpha\iota\delta\acute{\epsilon}\upsilon\text{-}\epsilon\iota$  etc. に対する  $\pi\alpha\iota\delta\acute{\epsilon}\upsilon\text{-}\sigma\omega$ ,  $\pi\alpha\iota\acute{\epsilon}\upsilon\text{-}\sigma\epsilon\iota\varsigma$  etc.

またアーリア語派でも  $-\text{sy-}$  が用いられた。cf. Skr.  $d\bar{a}\text{-sy-}\bar{a}m$  「私は与えよう」

ラテン語の場合にも  $*\text{-s-}$  を以て未来を用いる例があり、古ラテン語では  $fax\bar{o}$  の形が見えるという。cf. Plautus, Truculentus 643.  $eg\bar{o}\ fax\bar{o}\ d\bar{i}cat$ . 「私は彼が言うようにさせよう = 私は彼をして言わしめよう。」著者によれば、この形は接続法アオリストがその起源になっているという (*ibid.*)。

§27 一般的にいえば、「未来」を表すようになるためには、その前段階として行為に対する言主の態度、様態、乃至は予想、期待などのような、相的なものの存在があるように思われる。これは例えば英語においても *will*, *shall* などの *modality* を表すところのいわゆる「助動詞」の助けを必要とし、しかもこれらによって作られる未来形も、未だ完全には相的な意味合いから脱却し得てはいないと思われることに徴しても、明らかであると考えられる。

一方時制、特に未来時称が成立していないときに、これに先立って体系としての「相」が既に存在していたというのも考え難いであろう。むしろメシチャニーノフが観察しているニブヒなどの言語におけると同じく、相的なものは必要に応じて付加される接辞として存在していたのではなかろうか。

序でに言えば、セメレニイが古ラテン語ならびに古アイルランド語の未来形が接続法アオリストを起源としていると述べているのは (*ibid.*)、未来の指標とされる  $*\text{-s-}$  の出自を考えてのことであろう。周知のように、いわゆる語根アオリストは古代ギリシア語などにおいて既に生産性を失い、これに代わって接辞  $*\text{-s-}$  をもついわゆるシグマのアオリストが規則的なものとして一般化しつつあった。したがってこの同じ  $*\text{-s-}$  という要素が、何故に主として過去を表すようになったアオリストと未来形に共通する要素となり得たのかは誰しも疑問なしとしないところであろう。

§28 ラテン語や古アイルランド語において、接続法アオリストが未来形になったということに反対する研究者もいるが、彼らの反対の論拠とされるのは両者の母音度の相異で

| アオリスト  | 未来形       | 語根の意味  |
|--------|-----------|--------|
| ἐπαθον | πείσομαι  | suffer |
| ἦλυθον | ἐλεύσομαι | come   |
| ἔσχον  | ἔξω       | have   |

ある。これを纏めるとセメレニイ自身が紹介したものは、例えば表に掲げたようになる。

これに対してセレメニイは次の三点を挙げて反論している。

- ① この反論は特にサンスクリットにおいて明らかに認められるように、動詞にはアオリスト語幹の形成の仕方にいくつかの方法があることを考慮していないこと。
- ② シグマによる接続法の母音度は、例えば *πείσομαι* < \**peíth-s-*, *ἐλεύσομαι* < \**leudh-s-* のように、完全階梯 (i.e. E 階梯) をもっていること。
- ③ 統語論的には接続法は期待 prospective の意味を持って用いられることが多く、潜在的に未来に等しいこと。例えば *ἴδωμαι*, *γένηται* etc.

§29 この反論は、未来形のシグマがアオリストのシグマと共通していることの説明としては興味深いが、なお疑問も残っている。

第一にシグマのアオリストは比較的古代の発達にかかるものと考えられ、本来の行為そのものの意義はメイエが *le procès pur et simple* [18, p.199] を表すとする母音度ゼロの語根アオリストが担っていたと考えられる。もしそうとすれば、ニブヒなどに見られる汎時的なアオリストに当たるのはこの語根アオリストでなくてはならず、これが爾余の形の派生原基とならなければならないことになる。

一方アオリストが汎時的であることを止めるとすれば、先ず通常 E 階梯をとる現在形を析出することが未来形よりも先であると考えるのが常識的であろう。この現在形の析出は、既に述べた「眼前性」の強調を示す \**-i* (*hic et nunc*) の付加によっていわゆる一次語尾が出現したことを契機として、その具体的内容と

して行為の「流動性」を象徴する E 階梯を語根に採用するか、あるいはいわゆる鼻音接中辞 *infixe nasale* を伴う (これはバンヴニストの主張するように、接辞 *\*-n-* の *metathesis* の可能性が高いと思われる) ようになった結果であると思われることができるのではなからうか。もしそうであるとすれば、未来形は現在形から析出したと見るのが自然であろう。E 階梯を持ち、したがって現在形が既に存在していることを含意し、それ故に比較的后代の構成にかかる筈のシグマのアオリストが、何故派生の原基になったのかを理解することは、必ずしも容易ではないように思われるのである。

§30 セメレニイがこのように考えたについては、彼の描くこれらの形式についての全体像があると思われる。長さを厭わずに少々立ち入って見ることにしよう。

印欧語後期においては法も確乎として成立していた。接続法、希求法、ならびに疑いもなく遙かに早く成立した命令の爲の基本的な法としての命令法である。これらの法が個々の言語においてそれぞれの歴史的な位置づけを得るに至る方向性を以て、印欧語後期にどの程度まで既に発達していたかは、明らかでない。ラテン語の接続法は四つの「時称」をもち、ギリシア語は三つの接続法を、ヴェーダは同じく三つ (の接続法) を、全体として二つの時称しか持たないゴート語は、二つの (の接続法) のみを持っている。

ラテン語の接続法 *aduenat*, *tagāt*<sup>3</sup> などから通常推測されるのは、印欧語の接続法が未だ時称語幹と関係づけられては居らず、したがってそこには接続法の形式は一つしかあり得なかったということである。

この推測は次のような観察によって確かめることができる。個別的な言語、即ちギリシア語や梵語においては、接続法アオリストは、直説法過去とは関係のない意味を持っている。アオリストの意味が瞬時的で、時点を表すアスペクト *momentary*, *punctual aspect* をもつという仮定によってはこれを説明できない。なぜならばもし接続法アオリストが実際にアオリストから派生したとするならば、それは同じように過去の意味を持つはずだからである。これらの事実は、シグマのアオリストが未だシグマの現在の過去形に過ぎず、シグマの接続法が接続法現在だったときに、シグマのアオリストの接続法が形成されたとして単純に説明することができる。これに関係する独自のカテゴリーとしてのシグマの現在が消滅したとき、シグマの接続法はシグマのアオリストに帰属せしめられ、これと直説法との関係による類推に

<sup>3</sup>*aduenat*, *tagāt* はそれぞれ *adueniō* 「到着する」、*tangō* 「触れる」の古期ラテン語の接続法の形 (3pers. sg.) で、後に現在語幹の影響をうけ、古典期には *adueniat*, *tangat* の形をとるようになった。

よってこの新たな接続法は、体系が現実要求する接続法が既に接続法現在として存在しているにもかかわらず、語幹を直説法に合致させて、シグマのないアオリスト asigmatic aorist に加えられた。

従って接続法アオリストの特殊な統語法上の振舞いは、アオリストの特殊な意味的な側面の結果としてではなく、初期の時代から変化することなく潜在的に継承されてきた特徴なのである。直説法だけが変化したのであって、それも現在時称の消滅の結果なのである [25, p.303]。

§31 この説明は極めてわかりにくい。従って筆者の解釈も若干交えながらセメレニイの所説の解説をすれば、大凡次のようになろう。

1. はじめに例えば零階梯の語根にいわゆる二次語尾 (secondary ending-SE) を付した汎時的な「アオリスト」があったとする。例えば \*yug-t である。但しセメレニイは派生原基については何も触れてはいない。
2. これに対して hic et nunc を強調する要素 \*-i が SE に付加されていわゆる一次語尾 (primary ending-PE) が生じるが、これは当初は選択的 (facultative) なものであった。現在形としては「過程的」若しくは「継続的」な意味合いを強調するためか

- ① 零階梯の語根に接尾要素 \*-n- を付加する (\*yuneg-t(i) < \*yug-n(e)-t(i) — いわゆる nasal infix) か、あるいは、\*-n(e) を持たずに語根の母音度を E 階梯にするかして PE を持つ形 (i.e. \*yeug-t(i))、

ならびに

- ② 同じく \*-s- を付加し、語根は E 階梯とする形 \*yeug-s-t(i)

が生成された。

ある時点においてこれら ① 及び ② の現在形、ならびにこれからそれぞれ派生される (\*-i を持たない) 過去形とあわせて、四つの形が一時併存していたとするのである。

この ② の形こそ「シグマの現在」としてセメレニイが言及しているものに外ならない。この \*s の来源については後に触れるところがある。

3. これと平行する時期に成立したかどうかについての言及はないが、この二つの「現在」に対して語幹形成母音 (いわゆる thematic vowel- TV) を伴った

接続法が存在していた。これはそれぞれの「現在形」に対して *\*yuneg-e-t(i)* 及び *\*yeug-s-e-t(i)* の形を持っていた。従って機能としてはこれらの接続法は直説法の現在形に対応するものでしかなかった。

4. 次に「シグマの現在」*\*yeug-s-ti* の形が何故か消滅し、現在形が *\*yuneg-ti* に統合されるに及んで SE を持ち接辞 *\*-s-* を伴う「現在」*\*yeug-s-t* は *\*yuneg-ti* を現在とする動詞体系に組み込まれるようになり、既にそこに存在し、SE を備えた *\*yuneg-t* と対立するように至る。その結果、何故か最終的に *\*yuneg-t* が機能的に未完了過去となり、*\*yeug-s-t* はシグマのアオリストとなった。
5. これに伴い TV を用いて接続法を生成するモデルに従って接続法過去 *\*yeug-s-e-t* が生じた。これは *\*-s-* を持つことによって接続法アオリストと見られることになる。
6. 過去の事象を表す未完了過去ならびに何故か過去に特化したアオリストが成立するに及んで、未来を表す形式が必要になり、何故か曾ての接続法過去 (アオリスト) がこれに転用されるようになった。例えばラテン語の *esse* 未来 *erō* < *\*es-ō* がこれである。

結果として彼の描く体系を筆者なりに解釈すれば大凡次のような図になると思われる。

### セメレニイの体系図

| 出発点   | <i>*s</i> なし       | 変化先      | <i>*s</i> あり        | 変化先      |
|-------|--------------------|----------|---------------------|----------|
| 直説法現在 | <i>*yuneg-ti</i>   | 直説法現在    | <i>*yeug-s-ti</i>   | 消滅       |
| 直説法過去 | <i>*yuneg-t</i>    | 直説法未完了過去 | <i>*yeug-s-t</i>    | 直説法アオリスト |
| 接続法現在 | <i>*yuneg-e-ti</i> | 接続法現在    | <i>*yeug-s-e-ti</i> | 接続法アオリスト |



|          |             |
|----------|-------------|
| 直説法現在    | *yuneg-ti   |
| 直説法未完了過去 | *yuneg-t    |
| 直説法アオリスト | *yeug-s-t   |
| 接続法現在    | *yuneg-e-ti |
| 接続法アオリスト | *yeug-s-e-t |

## (2) 接尾辞 \*-s- について

§32 見られる通り、上述の説明は余りにも精緻であり、精緻であるだけに細部に亘っては、何故そういう変化が起こったのかについての種々の疑問も生じてくる。そのいくつかは既に述べた。それ以外の点についてもいろいろあるが、中でも最も問題になるであろうと思われるのはいわゆる s-現在である。ここでは「シグマのアオリスト」という表現に準じて「シグマの現在」と称することにする。

シグマの現在については、セメレニイは次のように述べているに過ぎない [25, p.282]。

The wide extent of the sigmatic aorist shows that it does at any rate belong to the Indo-European period, although it is perhaps the latest of the IE aorist formations. On its origin there is only one probable suggestion, namely, that it is the preterite of an s-present (*op.cit.*, p.282).

しかし同時に彼は接尾辞 \*-sk- に関連して、“In form -sk- would seem to be a combination of two suffixes, s + k, rather than an independent word, e.g. Toch. A skē- “strive” [25, p.273] と述べているところから、接尾辞 -sk- は更に \*-s- と \*-k- に分解が可能であり、シグマのアオリストなどに用いられるのはこの -s- を来源とすると考えているようである。接尾辞 -sk- の意義については既にメイエが “Pour le sens, \*-ske/o- fournit des présents d’aspect déterminé; il a souvent dans la formation secondaire à peu près le même rôle que l’infixe nasal dans la formation primaire” [18, p.221]. と述べているところからすれば、接中辞 -n- と接尾辞 -s- は第一系列の語幹 (いわゆる \*-mi 変化) に付くか、第二系列の語幹 (いわゆる \*-H-o 変化) に付くかの違いはあるが、両者は機能的には同等だということになるのであろう。

## §33 このことに関してイヴァーノフも同様の趣旨の発言をしている。

スラヴ語 (及びバルト語 cf. Lit. *pósėti*) 及びトカラ語、ヒッタイト語及び一部はラテン語においても、\**poH-s-* によって作られるサンスクリットのアオリストと同じ *-s-* に終わる語幹が保存されている。印欧語の *-s-* に終わる語幹と *-sk-* に終わる語幹は並存しており、それはヒッタイト語及び特にその他のアナトリア諸語において同じ機能を持つ *-s-* 及び *-sḱ-* による動詞において、特に明瞭に反映されている。*\*ed-s-* : *\*ed-sk-* のように相関する動詞のペアと同じように、意味的に近い *\*poH-s-* : *\*poH-sk-* の場合も再構築することができる。これはバルト語派リトワニア語の *póėti* 「敬う、養う、可愛がる」、ラティシ語 *pāsēt* 「可愛がる、世話をする」に対する、スラヴ語の *\*pasti* 「放牧する」、ラテン語の *pāscō* 「放牧する、養う」に反映している [38, pp.207-208]。

いうまでもなくここで *\*poH-* としているのは零階梯の *\*pə-tēr* 「護る人、父」の語根と同じものである。

イヴァーノフによれば、ブルックマンも既にこのことに気付いていたという。

ブルックマンは<sup>4</sup> 接尾辞 *\*-sko-* と *\*-so-* が密接な関係にある (例えばギリシア語 *ἀλκῆ* 「防御」に対する *ἄλεξω* 「防御する」、古英語 *ealġian*) ことを指摘した。彼は対応するヒッタイト語及びトカラ語の事実が未だ知られていないずっと以前に、接尾辞 *\*-sḱ(e/o)-* と *\*-s(o)-* の関係が *\*-sḱe/o-* が *s + ḱ(e/o)* に由来する証拠であるという考えに傾いていた [38, p.209]。

## §34 ガムクレリゼはヒッタイト語において、例えば

*lingauš šarriškir*

(人々は) 誓い (複数) を破った。

*lingain šarrier*

(人々は) 誓い (単数) を破った。

のような例を挙げて、行為に関係するアクタント *актант* が複数の時に *-šk-* の語幹が用いられることに言及している。いわゆる活格言語類型あるいは能格言語類型に関して、意味上の自動詞の場合には、文法的一致は意味上の主語に立つ絶対格の名詞と、また意味上の他動詞の場合には意味上の目的語を示す絶対格の名詞と、それぞれ行われるという。ガムクレリゼはこれに続けて次のよう

<sup>4</sup>K. Brugmann cf. [3, T.3: I, pp.336-351].

に述べている。

動詞においてアクタントを表すこの同じ形態的要素は、動詞の表す行為あるいは状態の種類 вид という、アスペクト的な対立を表すためにも用いられる。アクタントの複数性のマーカーとしての *-sk-* がもつ *iterative* というアスペクト的意義については Bectil 1756 を参照のこと。

このような機能的・形態論的な相関関係は、動詞が時間的な原理ではなくアスペクト的な原理によって対立する、活格類型言語の特徴と対比することができる [36, I, pp.307-308]。

動詞が文法的に一致する項が複数の場合、多くの場合行為が万遍なく行われることを含意するから、動詞は意味的に *iterative* になることが多いと考えるのは論理的である。印欧語においてこれに当たる生産的な接尾辞としては *\*-ske/o-* がある。この接尾辞は「起源的に *\*-s-* および既に廃用に帰した接尾辞 *\*-k-* から成っている」[11, p.133]。

ヤサーノフはこの *\*-ske/o-* を構成する *\*s* によって「有微的な現在として形式化されたもの」を *s-present* と呼んでいる (*ibid.*)。「シグマの現在」である。

このように *\*-ske/o-* の構成にかかる動詞が *iterative* 的な様態を表すとすれば、そしてまたこれが *\*-s-* + *\*-k-* に分解できるとすれば、*\*-s-* も機能的に *\*-sk-* の機能と矛盾しないものであると考えるのが自然である。そうとすれば、無標的な原「アオリスト」語根から現在形を作り出す爲にこれが用いられるのは見やすい道理であるが、「持続」であれ、「継続」であれ、行為の反復 *iteration* と矛盾しない意義を持つべき *\*-s-* が付加された形式が、何故アオリストの意味を担うようになったかを説明することは、非常に困難であるように思われる。ましてその同じものがどうして未来形を作るのに用いられたかについても、大きな疑問を感じない訳にはいかない。

更にまた、シグマの現在が存在していたとして、これがどういう理由で消滅したのかについても、明確な説明はない。またこの構成を持つものが次節で述べるように、何故 *desiderative*、*inchoative* あるいは *causative* の意義を獲得し得たかについても説明は難しいであろう。

§35 ヤサーノフは *\*-s-* ならびに *\*-ske/o-* の構成にかかる動詞について種々

の言語の例を挙げ、如何にも唐突に「これらの例から明らかなように、\*-s- 及び \*-s<sup>h</sup>ke/o- に終わる現在意味の範囲が広い — desiderative, future, inchoative, iterative 及び causative である」とし、それらの相異なる意味についてその関連を説明しようと試みている (op.cit., p.134)。

最も一般的な「X になりたい、または X をしたい」be disposed to be or do X (あるいは「X になりたい、または X をしてみたい」be intent on becoming or doing X のような意図のニュアンス conative nuance) を意味する願望の形は、「常習的に X である、または、X をする」という意味になりやすい。そこから完全な iterative (「繰り返し X をする」) の意味へは、特に過去の文脈においては、わずかに一歩でしかない。

同様に潜在的に状態の変化を表す動詞の場合、「X になりたい、X をしたい」という意味は、「X になる最初の段階にある」という意味と現実的には区別できない (?—I.Y.)。このことは inchoative の機能 (sc. 「X をはじめる」—I.Y.) への自然な橋渡しになる。

しかしこの種の説明は余りに ad hoc なものといわざるを得ないであろう。

§36 更にヤサーノフは印欧祖語においてシグマの現在を構成していた動詞の形式上の特徴について、次のような分類を与えている (op.cit., p.133)。

1. テマティックで \*ē : \*ě の交替を持つもの。Hitt. *ganēšzi* 「それと知る」 (< \**gnēh<sub>3</sub>-s-ti*); cf. Toch.A *kñas-* 「やつと到達する」、Arm. aor. 1.sg. *caneay* (< \**cnñis(a)-*) 「私は知っていた」、Lith. 3.pl. *duōs* 「与えよう」、Lat. *faxō* 「私はする」 (< \**faksmi*) etc.
2. \*o : \*e の交替を持つもの。\**h<sub>2</sub>uóg-s-* / \**h<sub>2</sub>uég-s-* 「成長する」、pre-Gr. \**g<sup>w</sup>ól-s-* / \**g<sup>w</sup>él-s-* 「欲する」。
3. テマティックで \*e 階梯を持っているもの。唯一の確実なものはギリシア語の未来形で、deponent の変化が多い。*ὄψομαι* 「私は見るだろう」、*ἀκούσομαι* 「私は聞くだろう」、*γράψω* 「私は書くだろう」 etc.
4. \*-ye/o- によって拡張したテマティックのタイプ。インド・イラン語派の \*-sja- (Ved. *vakṣyámi*, AV. *vaxšiiā* 「私は言おう」のタイプを含む)、リトワニア語の s-未来の分詞 (*dúosint-* 「与えようとするところの」)、孤立している OCS の形容詞 *vyšqšt-* 「来るべき」。

§37 印欧語の \*-s- については、ウォトキンスは別の説明をしている。即ち、

..... しかしこの形は一種の「 테마ティックな祈願法 precative」として説明できる。..... インド・イラン語派の希求法アオリストは三人称単数の -yā-s において、\*-s- という古い語尾を持っていた。これは接尾辞の構成要素と理解されるようになり、パラダイムの全体に広がって一人称単数の -yās-am に始まる「祈願法」が生じた [27, p.235]<sup>5</sup>。

即ち希求法の接尾辞 \*-oi- をもつ希求法アオリスト optative aorist の三人称単数形の語尾として用いられた \*-s が、やがて接辞と考えられるようになり、この要素を含めた語幹に例えば一人称単数の語尾 \*-om が新たに加えられて -yās-am のような形が作られたというのである。この説は少なくともシグマがアオリスト語幹を形成する起源となったということを説明することができる。また未来形は元々期待、乃至願望のようなモードゥス的なものから発生したと考えれば、これが未来をも表すようになったことをも説明できるように思われる。

即ち本来接尾辞 \*-oi- に帰属していた希求法の機能が、\*-yās のような形を介して、本来は語尾であるべき \*s の機能と解されるに至ったというのである。

これはバロウがサンスクリットの祈願法 precative に関連して、次のようにいっていることと符節を合している。

能動相の諸形は s によって延長された希求法の語幹から形成される。能動相三人称単数のより古い形はヴェーダに残っている bhūyās であった。中動相の諸形はシグマのアオリストの語幹から形成され、祈願法の要素 -s- は単数及び複数の一人称及び複数三人称において欠如している。祈願法は古典語に伝存している非現在時称語幹から作られる唯一の法の形である [33, p.328]。

一方コートランドは「s-未来と s-アオリストは \*-s- に終わる、かつての完了体動詞の現在と過去である」<sup>6</sup> と述べている。これはスラヴ語を念頭に置いてい

<sup>5</sup>Doch läßt sich die Form als eine Art “thematischer Prekativ” erklären. Aus T. Burrows Studie in *Asiatica (Festschrift Weller)* 35-42 und aus meinem *Celtic Vb.* 90 ff. erhellt, daß der athem. Aorist-Optativ im Indo-Iranischen eine alte Endung \*-s in der 3. Sg. -yā-s hatte, die als Bestandteil des Suffixes verstanden und auf das ganze Paradigma verbreitet wurde, wodurch der “Prekativ” mit der 1. Sg. -yās-am entstand.

<sup>6</sup>Pedersen reconstructs an Indo-European future tense with a stem in \*-s- which is best preserved in Italic and Baltic. The stem was the thematicized in Greek -se-, -so- and in

るのであろうが、印欧祖語に既に体系として確立している完了体・不完了体の概念を持ち込むのは適当でないと思われる [14, p.151]。

§38 セメレニイは、シグマのアオリストの一般化はその程度からして印欧祖語の後期に生じたのではないかと考えている。これは妥当な考えであろうと思われるが、シャントレーヌがホメロスにおいてこの形が既に広く見られることを指摘していることから見て [4, I. p.408 & seq.], 一般化が起こったのはホメロス以前の時期に遡ると考えられる。またセメレニイは「*s*-現在」についてクリロヴィチに言及しているが、ここにも特に新しい情報は見られない。

Il y a existé un présent athématique en *-s-*, supplanté d'autres formations du présent et ne survivant qu'en fonction de subjonctif (p.ex. subjonctif v.irl. *téis* < \**steigh-s-ti*)..... Ainsi G. Bechtel... "In Hittite, the distribution of forms corresponding to *s*-presents and *s*-aorists is such as to suggest that these are ultimately one and the same, an old suffix which gave to the verb "a special semantic force (probably ingressive or inceptive)" [17, pp.32-33].

§39 印欧語のシグマの現在に関して上で引用したヤサーノフの言説をみれば、専らシグマによって特徴づけられる独立した文法的な形式として、シグマを持たない現在に対立していた「現在形」が存在していたというには、「シグマの現在」が余りにも断片的、非体系的であるという感を否むことができない。これは文法カテゴリーというよりは、むしろ語彙的な範疇に属すべき問題として扱うべきものではないかと考えられる。その際にはいわゆる *nasal infix* をもつ動詞が例えば持続的過程を表し、シグマをもつ動詞が反復的行為を表すことによって、汎時的なアオリストに対して現在時に特化する機能を強めたというのは、あり得る想定であろう。

それにも拘わらず、いわゆるシグマの現在があったとすれば、その成立はシグマのアオリストよりも早い時期でなければならず、また汎時的な「アオリスト」よりも後でなければならぬであろう。一方、汎時的な「アオリスト」が存在しうるのが、未だ時制が存在しない時期、即ち印欧祖語が未だ活格言語の段階にあった時であるとすれば、そしてもしシグマの現在なるものが独立して

---

Indo-Iranian, Sanskrit *-sya-*. The *s*-future and the *s*-aorist represent the present and the preterit of an earlier perfective verb stem in \**-s-*.

存在したとするならば、それは祖語がまさに対格言語に移行しようとする時期ではなかったかと思われるのである。

いずれにしてもこの問題は、未だ完全に解決されてはいないと考えられる。ただ一つ言えそうなことは、汎時的なアオリストが、やがて現在、未来、過去などの時制を自らの中から生み出していったであろうということである。しかしそのメカニズムの詳細については今後の研究に俟たなければなるまい。

## 7. 完了形

### (1) 現在完了

§40 完了形は比較的新しくできたものとされ、言語毎にさまざまな形をとっているように見受けられる。主としてギリシア語の動詞についてかなり詳細に考察しているのはペレリムーテルであるが、彼はその著『印欧共通語及びギリシア語の動詞』において、完了形について次のように述べている [46, p.5]。

斯学の文献において完了形に関する最も一般的な定義によれば、印欧語、及びまた最古のギリシア語の完了形が意味するのは、先行する主語の行為の結果として始まる「彼の状態」である。この定義はブルックマンがコンペンディウムにおいて述べたものである<sup>7</sup>。原理的にこれに類する定義は近年に世に出た労作に至る、多くの他の論文においても見出される。

しかしホメロスの叙事詩において極めてしばしば出逢うのは、明らかに上述の定義に沿わない意義を持った完了形である。これらの「不規則な」完了形の中に、通常強調の完了形 *интенсивные перфекты* といわれる、かなり大きなグループとして他と区別されるものがある。これは純粋に現在の意義を持っていて、文献のテキストによってこれを判断する限りでは、これと並行する現在形を全く持っていないか、あるいは時間の面においても、アスペクトの面においても、相に関しても、これに対応する現在とは異なるところがない。

ホメロスの言語においてこのグループに属するものには、彼によれば、*μέμωνα* 「望む」、*τέθηπα* 「訝る」、*δεῖδω, δεῖδία* 「怖れる」、*προβέβουλα* 「～の方ををよしとする」、*μέμηλα* 「気にしている」、*τετίγα* 「怖れている」、*δέδορχα* 「眺める」、*ὄδωδα* 「匂う」、*τέτριγα* 「ピーピー鳴く」、*μέμηχα* 「羊が啼く」、*μέμυχα* 「牛が

<sup>7</sup>K. Brugmann, *Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, 2. Bearb. Bd 2. T.3. Strassburg 1913, S.83.

啼く」、γέγωνα「叫ぶ」、ξοιχα「似ている」、βέβρυχα「反芻する」、εἰωθα「慣わしとする」などがあるという。

§41 ペレリムテルによれば、ホメーロスの言語においては、完了形は現在・アオリストを持たず、いわば孤立した *perfecta tantum* の状態で存在しており、意味的にはこれと同じであるが、語彙的には完了形とは異なる現在形が存在するものがしばしば見受けられるという。

また同じ語彙の一つの変化形式を構成するとみられる完了形でも、現在・アオリストが他動詞であるにもかかわらず、完了形は原則として自動詞的な意義もってこれと対立するものが多いとされる。このことから、たとえ語根のレベルにおいては同じものでも、本来は異なった語彙を構成していたと考えられる (*op.cit.*, pp.24-26)。

第三に完了形の古い人称語尾は、単数において *-a*, *-tha*, *-e* (< *\*-h<sub>2</sub>e*, *\*-th<sub>2</sub>e*, *\*-e* [11, p.32]) であると考えられているが、これらの語尾はアオリスト・現在形の人称語尾とは全く関係のない独立したものであることが知られている。この形はギリシア語では *οἶδα*「知っている」のみに伝存している。

また歴史的に完了形が後になって形成されたと主張する人々が、しばしばその根拠として完了形が O 階梯の語根をもつことを挙げていることに対して、著者は完了の場合に語根が取るという O 階梯は必ずしも完了形の本質的な条件ではないとする、メイエの主張を引用している [18, p.205]。

これは上述したようなブルックマンの定義に合致しない「不規則な」完了形が、多く O 階梯を持たないことによっているのであろう。

§42 これらすべてのことから、著者は次のように結論づけている。

これらすべてを考慮すれば、完了形は初原的には動詞体系の内部における語構成上のカテゴリーではなく、物理的ならびに心理的状态を表現するための語彙的文法的な語のクラスだと考えない訳にはいかない。

主体は自己の意思によらずして何らかの状態にある。最古の完了形によって表される状態は、主体の側からのいかなる活動性 *активность* をも前提としてはいない。主体の活動性の欠如という正にこの特徴こそ、おそらくは古代の完了形が述語の役割を担う文法構文の、最も典型的な意味的特徴なのである。我々の考えでは、現在・アオリストの体系と完了形の体系との最も古い意味的相違は、活動性 *активность*

(現在・アオリスト)/非活動性 *инертность* (完了) の対立という点に存している [46, p.29]。

§43 この問題についてはガムクレリゼとイヴァーノフも大きな関心を寄せている。序でに言えば、ガムクレリゼとイヴァーノフの共著になる『印欧語と印欧人』*Индоевропейский язык и индоевропейцы* [36] 全二巻は、周知のように印欧語比較文法について、クリモフ等によって発展されてきた内容的言語類型学の立場から全面的な体系化を行おうとした壮大な試みであり、少なくともその基本的な考え方については、これに異を唱えることはできないと思われる。しかし内容的類型学においても、細部に亘っては未だ多くの問題を残していると考えられ、印欧語比較言語学への応用の試みにも未だ多くの解明されていない点がある。このことは印欧語の完了形の問題についても同様である。

今、ガムクレリゼ等の依拠する内容的類型学の中心概念を一応まとめれば、大凡以下の通りになろうかと思われる。

1. 先ず印欧祖語は活格言語類型に属しており、それが歴史時代に入るとおそくは直前に直接対格言語類型に発展したと考える。(クリモフの一連の著作によれば活格言語類型は、コーカサスの諸言語が属しているような能格言語類型を経て対格言語類型に発展する場合と、直接対格言語類型に発展する場合の二つの道程があると考えられ、印欧語はその後者であるとされている。ガムクレリゼ等もこれに従っている。)
2. 活格言語類型を貫く構成原理は、対象が生物であるかないかである。(変異形として例えばロシア語に見られるような活動体と不活動体の区別を取るものもあると考えられているが、この場合植物を不活動体に所属せしめる言語と、活動体に帰属せしめるものがあるという。ロシア語は前者に属している。)
3. 生物性に属するものは、行為者ともなり(活格)、状態乃至は性質の担い手となることも(絶対格)、また行為を蒙る被行為者(絶対格)となることもできる。これに対して非生物性に属するものは、状態あるいは性質の担い手になるか、あるいは被行為者(絶対格)になる以外にない。

4. 動詞の表す行為あるいは状態乃至性質が、いかなる対象に関するものであるかを説明するのは、常に絶対格に立つ名詞である（例えば「次郎-死んでいる」、「空-青い」）。そしてそこに表現される事態を生じさせた行為者は「活格」に立つ（例えば「太郎（の行為で-活格）」-「[次郎]-「死んでいる」」）。

このような構造においては動詞は一種の一項述語であり、関係項は絶対格に立つものでなければならないであろう。もしそうとすれば、この種の言語には本来他動詞・自動詞の区別は存在しないことになる。他動詞のような二項述語の場合であれば、一方は行為を積極的に他に及ぼす活性の語、他方は行為を蒙る不活性の語という形を取ることになる。

動詞が直接活性の名詞に従属し（即ち活性の名詞と文法的な一致を行い）二次的に行為が及ぶ対象として活性または不活性の名詞を取るに及んで、自動詞と他動詞の類別が生じる。対格言語への移行である。

そこに到達する前の遷移的段階としての能格言語においては、自動詞と他動詞は未だ完全には分離されていないとされている。

5. ガムクレリゼ等は完了形はその起源において不活性主体に関わり、その状態を表す述語であったとしている。

§44 上に述べたようないわば典型的な活格言語類型においては、一項述語の関係項は本来生物性（性）の名詞であるか否かによって、当然異なる動詞を用いることになるはずである。ガムクレリゼ等は大凡このように考えていると思われる。

しかし「生物（性）」と「無生物（性）」、「活性」と「不活性」とは既に見たように範疇的に異なった概念であり、「無生物（性）」が「不活性」以外の性質を持ち得ないのに対して、「生物（性）」は積極的に行為を他に及ぼす「活性」の属性を取ることも、また他に及ぼすことのない、いわば自己完結的な行為あるいは他からの行為を蒙る「不活性」になることもあり得る。ガムクレリゼ等ではどちらの場合も「活性」активныйと「不活性」неактивныйの用語を当てており、このことが彼らの行論をわかりにくくしているように思われる。いうまでもなく「生物（性）」/「無生物（性）」が語彙的・意味的範疇であるのに対して、「活

性) / 「不活性」は統語的範疇に属する。

このことの帰結として現代語ならば生物であるか否かに関わらず、同じ動詞を用いて表現するものでも、今論じているような言語においてはそれぞれ異なる動詞を用いることになる。ガムクレリゼ等が次のような対照表を挙げているのもこの意味であろう。

生物に対応するものを *\*-m(i)* 系列、無生物に関わるものを *\*-Ha* 系列とすれば、例えば (*op.cit.*, Vol.1, p.295)、

| mi 系列 (生物)                                                                                                                                                                                                                     | Ha 系列 (無生物)                                                                                                                    |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| IE <i>*es-</i> 「ある」: Hitt. <i>eš-mi</i> 1p.Sg., <i>eš-zi</i> 3p.Sg.; Skr. <i>ás-mi</i> , <i>ás-ti</i> ; Gr. <i>ἐι-μί</i> , <i>ἐσ-τί</i> ; Lat. <i>sum</i> , <i>est</i> ; OCS (Old Church Slavonic) <i>ec-mъ</i> , <i>ec-mъ</i> | IE <i>*b<sup>[h]</sup>uH-</i> : Skr. <i>babhúva</i> 1p.Sg.pf.; Gr. <i>πέφυχα</i> ; Lat. pf. <i>fuī</i> , OE <i>bēom</i> 1p.Sg. |
| IE <i>*ses-</i> 「横たわる」: Hitt. <i>šeš-zi</i> 3p.Sg. 「寝る」; Skr. <i>sásti</i> 「寝る」                                                                                                                                                | IE <i>*k<sup>[h]</sup>ei-</i> : Hitt. <i>kitta-ri</i> 3p.Sg. 「横たわる」; Gr. <i>κεῖται</i> 「横たわる」; Skr. <i>śéte</i> 「横たわる」         |
| IE <i>*st<sup>[h]</sup>aH-</i> : Gr. <i>ἵστημι</i> 1p.Sg. 「立っている」; Skr. <i>tíṣṭhati</i> ; Avest. <i>hištaiti</i> ; Hitt. <i>tijami</i> 「入る」                                                                                    | IE <i>or-</i> : Hitt. <i>arḫaḫari</i> 「昇る」; Gr. <i>ῥίπτο</i> ; Lat. <i>orior</i>                                               |
| IE <i>*es-</i> : Hitt. <i>eš-zi</i> 3p.Sg. 「坐っている」<br>cf. Gr. <i>ἵσταται</i> , Skr. <i>áste</i>                                                                                                                                | IE <i>*set'-</i> : Skr. <i>sasáda</i> 「坐っている」                                                                                  |

これらのうち、例えばラテン語における *esse* 「存在する」の *sum* < *\*s-om*, *es* < *\*es-s*, *est* < *\*es-t* 「現在形」、*erō* < *\*es-ō* 「未来形」などの infect system と *fu-ī* < *\*bhu-ai* 「完了形」[48, p.288] 等の perfect system に見られるように、この二つの系列は一つの動詞の変化形になるか、あるいは *stō* 「立っている」に対する *orior* 「現れる、昇る (cf. *orient-* < 陽の昇る >)」のような、語彙的に異なるものとなっていた。*fu-ī* の語尾は *\*ai* に遡り、サンスクリットの完了形中動相一人称の語尾 *-ē* 及びスラヴ語の *emъ* < *\*woid-ai* の語尾 *-nъ* に規則的に対応している (*ibid.*)。

ここで特に指摘しておく必要があると思われるのは、ここに掲げられた動詞が何れも状態を表す動詞だということである。即ち、状態あるいは性質を表すものは関与する名詞が生物性であっても非生物性であっても構わないが、行為の場合には、少なくとも動詞述語に自動詞と他動詞の区別の存在しない言語段階においては、非生物性は関与できないということである。生物性と非生物性は、ここでも格におけると同様に非対称なのである。

§45 上述第5項にみるように、主体の恣意のいかなる影響をも受けない (i.e. 不活性主体の) 述語としての制限をもつとすれば、完了形は、たとえ生物に属する主体に関する場合であったとしても、初原的には圧倒的に第三者に関するものが多いと推測することができる。もしそうとすれば、初原的にはこの種の動詞は人称としては三人称しか持っていなかったに違いない。むしろ人称はこれを所有していなかったのいうのがより正確であろう。ガムクレリゼ等はこの点について次のように述べている。

不活性のクラスの名詞につく動詞構造の意味的特性をみれば、このパラダイムは *\*-m(i)* 系列のものと較べて欠如的 *дефектный* なものであったに違いない。即ち問題は不活性クラスの名詞の意味が、コミュニケーションに参加する一人称および二人称の形を *\*-Ha* 系列の動詞体系に許容しないという点にある。これら [sc. の動詞] がその意味的特性によって、不活性クラスを代表することができないからである。従って不活性一価の動詞のパラダイムには、本来 *\*-e* に終わる三人称単数の形ただ一つのみがあった。正にこの故に動詞三「人称」の形は、構造的に人称に関する範列的対立を持たない非人称の形であった [36, p.297]。

ガムクレリゼとイヴァーノフは、このような初原的な不活性主体の述語になる場合として *\*ak<sup>[h]</sup>men \*k<sup>[h]</sup>ei-e* 「石(が)横たわっている」、あるいは *\*neb<sup>[h]</sup>es- \*leuk<sup>[h]</sup>-e<sup>8</sup>* 「空(が)輝く」のような構文を考えた [36, II, p.297]。これは不活性主体を表す絶対格が非人称動詞述語を修飾しているとも、またこの絶対格が形容詞的な述語に付加されたとも取れるであろう。

ペレリムートルは、生物または無生物が取りうる状態を表す場合として、物理的状态、恒常的性質、感覚に訴えるものを挙げている。例えば、

δεδηα 「燃えている」、πέπηγα 「突き出ている、聳えている」、  
τέτηγα 「満開である」、σέσηγα 「腐っている」、δλωλα 「朽ちている」、

<sup>8</sup> ガムクレリゼ等は伝統的な印欧語比較言語学の再構成した破裂音の三系列「有声音」(*\*b, \*d, \*g, \*g<sup>w</sup>*)、「有聲有氣音」(*\*bh, \*dh, \*gh, \*g<sup>w</sup>h*)、「無聲音」(*(\*p), \*t, \*k, \*k<sup>w</sup>*) に対してこの再構成の結果は言語類型学的に難点があるとして、それぞれ「喉音閉鎖音系列」(*\*ʔp, \*ʔt, \*ʔK*)—それぞれ *p', t', K'* と書かれる、「有聲音系列」(*\*b<sup>[h]</sup>, \*d<sup>[h]</sup>, \*G<sup>[h]</sup>*)、「無聲音系列」(*\*p<sup>[h]</sup>, \*t<sup>[h]</sup>, \*K<sup>[h]</sup>*) を指定した。肩に括弧付きの *h* があるものは有氣・無氣が選択的であることを示し、また *\*K, \*G* としたのは従来 *\*k* と *\*k<sup>w</sup>* のように喉音と喉唇音を区別していたのが、方言的差異に過ぎないとして統一されたことによる。なお laryngeal は *\*H* と書かれる。

τέτρηχα「荒れ狂っている」、ὄρωρα「発生している」、ἔοιχα「似ている」、ὀδωδα「匂っている」、βέβρυχα「うなっている」etc.

これらの例の存在は、少なくともガムクレリゼ等のいう基本的な構文がかつて存在していたことを裏付けるものとなろう。

§46 このような無生物名詞に関わり、それ故に \*-e の語尾をもつに過ぎなかった状態動詞が、何故一人称、二人称にも用いられるに至ったかは、大きな問題となる。ガムクレリゼはこれを無生物性と生物性活性の二つのアーグメントを取る構文の影響であるという。即ち

不活性のクラスの名詞を伴う構文において、一人称、二人称、三人称という形を持つ、完全なパラダイムの発生は、より後の時期に帰すべきであり、これはそれぞれ Agens と Patiens の機能を持つ (生物性の—引用者) 活性と不活性のクラスが結合した二価の動詞構文のパラダイムの影響に帰されるべきである (op.cit., pp.297-298)。

ガムクレリゼ等は範例となった構文として、次のようなものを挙げている。ここで A というのは生物性の名詞であり、A<sup>ln</sup> というのは生物性でかつ不活性の名詞を意味している。当然前者は行為者 Agens であり、後者は Patiens である。

| Agens   |   | Pred.   |   | Patiens <sup>ln</sup> |
|---------|---|---------|---|-----------------------|
| 1p. A   | — | V-mi    | — | A <sup>ln</sup>       |
| 2p. A   | — | V-si    | — | A <sup>ln</sup>       |
| 3p. A   | — | V-ti    | — | A <sup>ln</sup>       |
| человек |   | убивает |   | зберя                 |

ここで A というのは生物性の名詞であり、A<sup>ln</sup> というのは生物性でかつ不活性の名詞を意味している。当然前者は行為者 Agens であり、後者は Patiens である。

§47 しかし著者等はこの構文がどのようにして成立したかについて、語るところがない。ガムクレリゼ等が主張しているように印欧祖語が活格言語であったとすれば、既に述べたように他動詞と自動詞の区別は存在していなかったはずである。もしそうとすれば、動詞述語を直接に「修飾する」のは不活性の格、上の表では A<sup>ln</sup> の項でなくてはなるまい。活格に立つものは、そのような第一

次のシンタグマに対して二次的にこれを修飾するものと考えられる。してみれば、少なくとも動詞述語がまず文法的一致を行うのは、 $A^n$  でなくてはならないことになる。

従って上述の表に示されている形は、既に対格言語に移行して、他動詞と自動詞の区別が生じた後の状態でなければならないと思われるのである。

再び従って、もしこのような構文が考えられるとすれば、これに先立って生物性不活性の名詞(絶対格)に関わりこれと文法的に一致する一価述語(即ち動詞述語を関数としたとき変項が一つである場合、即ち  $S = f(x)$  のような場合)、例えば  $V-mi-A^n$  のような構文が存在していなければならないであろう。もしそうでなければ、非生物性と結合する動詞が  $*-m(i)$ ,  $*-s(i)$ ,  $*-t(i)$  とは異なった語尾を必要とする必然性がないと思われるからである。なぜならば、 $*-m(i)$ ,  $*-s(i)$ ,  $*-t(i)$  の存在は、当該動詞が生物性のアグメントを取ることを、前提としているからである。その場合、次のようなガムクレリゼ等の説明は理解できなくなる。

しかしながら両方とも専ら活性の関係項 *актант* である二価の動詞構造のパラダイムと並んで、印欧語には二価の動詞が *Patiens* として不活性のクラスの関係項と結合し、他方が *Agens* として結合する、例えば *Человек кладет камень* のような構文があったに違いない。活性と不活性のクラスを厳格に区別する言語の場合、このような構文は当然のことながら、二つの関係項が活性のクラスである構文とは異なった構造を持っていなければならない (*op.cit.*, p.298)。—ゴチック引用者。

この場合、もし生物で活性の名詞と動詞述語が常に一致していたならば、*Patiens* が生物であるかないかに関わらず、動詞の語尾に変化はあり得ないことになるであろうからである。

§48 完了形がどのようにして二価的なものになったかは現在の所よく分らないが、シャントレーヌは「完了は(ホメロスにおいてすら)対格の補語を取ることができたが、その場合でも主語の状態を表すという意義を保っていた。例えば B272 の詩において、完了が対格を伴っている。しかしここでも何よりも先ず主語の状態が述べられているのである。 $\tilde{\eta}$  δὴ μὲν Ὀδυσσεύς ἐσθλὰ ἔοργεν <確かにオデュセウスは多くの功を立てた>」と述べている [50, pp.153-154]。

そうとすれば、これは見かけ上は二価の述語に見えるが、対格 ἐσθλὰ は真正の目的語ではなく、恰もギリシア語の限定の対格のように、一価の述語の限定語として用いられたのではないと思われる。

シャントレーヌによれば、完了形が二価の述語として用いられるようになったのは、五世紀頃であるという。

五世紀頃にギリシア語において新しい意義を持ったタイプの完了形が発達した。古い完了形は主として主語の状態を表していた。

その後 ὅσα ἔοργε 「彼がなした限りのこと」のような表現から出発して完了形が最早主語に対してではなく、対象に対する結果を表現するために用いられはじめた。

例えばツキュディデースは結果を強調するためにアオリストの ἔγραφε の代わりに完了形 γέγραφε を用いている。

γέγραφε καὶ ταῦτα ὁ αὐτὸς Θουκυδίδης Ἀθηναῖος (V, 26)<sup>9</sup> .

現在時の意義をもつ自動詞の古い能動相完了形の上に……他動で結果の意義をもつ完了形がかぶさってくるのである (op.cit., p.166)。

§49 一価の述語の一部が二価の述語に変化した時に、他動詞と自動詞の区別が生じたであろうことは、恐らく間違いないにしても、やはりそのプロセスの細部に関しては疑問が残る。この問題は今後詰めていかねばならない課題であろう。ガムクレリゼの説明は余りにも大雑把で説得性に乏しいように思われる。

シャントレーヌの述べている「現在時の意義をもつ自動詞の古い能動相完了形の上に……他動で結果の意義をもつ完了形がかぶさってくる」という表現に沿うかも知れないものとして、いわゆる「対象活用」objective conjugation の考えがある。印欧語に対象活用が存在していた可能性を示唆した研究者に、筆者の知る限りではパウル・クレッチマーならびに彼の説を「補足してその信憑性を高める」としたハインツ・クロナッサーがいる [13]。

クレッチマーが印欧語における対象活用の存在を提唱したのは、ハンガリー語、コーカサス諸語、アメリカ先住民の言語などに見られる対象活用からの類推であったようである。例えばグリーンランド・エスキモーの言語では *kapiw-a-ra* 「突く・彼・私 = 私は彼を突く」、*kapiw-a-t* 「私・彼・お前 = お前は彼を突く」、

<sup>9</sup> 「それらのことも他ならぬアテーナイのツキュディデースが書いている。」

*kapiw-a-a* 「突く・彼・彼 = 彼は(別の) 彼を突く」のようになるという。ここで動詞の直後の要素 *-a-* は目的語の「彼」を指し、最後尾の要素 *-ra, -t, -a* はそれぞれ一人称、二人称、三人称の主語を表すというのである [12, pp.10-11]。このような対象活用をもつ言語は言語百科に数多く記述されているが、意味上の主語に当たるものが殆どの場合、最後尾に立つという特徴を持っているように思われる。

このような関係項を表す要素の順序を持つものについては、例えば上述の *kapiw-a-ra* のような場合、現在は目的語を表すとされる *-a-* は本来は唯一の関係項(絶対格相当)として *\*kapiw-a* のように用いられていたが、後に行為者を表す *-ra* がかぶさることによってこれた目的語に転化したという見方もできよう。動詞 *kapiw-* はそれに伴って例えば「手を突き出す」のような自動詞的なものから「誰かを付く」のような他動詞的なものに意味変化を生じたと考えるのである。未だ証明はされていない単なる仮説に過ぎないが、対象活用をもつ言語のかなりの部分が、このようにして活格言語類型から対格言語類型乃至能格言語類型に発展した可能性もまた、完全には否定することはできないであろう。

しかしクレッチマーの挙げている印欧語の例はかなり恣意的で説得性を欠いているように感じられる。従ってこの問題はなお未解決だといわねばならないであろう。

これと別の道筋として考えられるのは、例えば (stative に用いられた *-a, -tha, -e, 3p.Pl. \*-r* のような第二種の語尾に対する) 本来状態を表す完了形の語尾を、*\*-m(i), \*-s(i), \*-t(i)* 等の第一種の語尾に変えることによって、いわゆる過去完了形が作られたように、活格と対応する形に置き換えるというプロセスであるが、これにも難点がある。過去完了形が生じたのが、非常に新しい時代であって、ホメーロスの時代においても未だ散発的に過ぎなかったからであり、このようなことが起こったとすれば、それは印欧語が対格言語類型に移行する段階でなくてはならないと、考えられるからである。この問題は活格言語類型が対格言語類型に転換する際の理論的な鍵となる問題であるが、その重要性にもかかわらず、現在では解決できていない。その理論的重要性についても未だ充分には意識されていないように思われる。

§50 以上完了形、特に現在完了の問題を、最近の内容的類型学の観点から整理してみたが、印欧語において完了形が本来「現在の」状態を表すものであったこと、ならびにこれが結果の意義を持つてはいなかったことについては、概ね既に多くの研究者の共通の諒解になっていると思われる。

例えばシャントレーヌは「完了の本来の意味は現在時あるいは少なくとも現実に位置づけられる状態を表すことにあり」とし、「ある種の概念は状態の意味になじむから、他のものよりも完了形を作り易い語根というものがある」として<sup>10</sup>、①感情を表すもの(例えば γέγηθε < γηθέω 「喜んでいる」、τετίνμαι pf.tantum 「悲しんでいる」、δείδω cf. \*dedwoya 「怖れている」)、②身体の状態を表すもの(例えば, δεδάχρυνται < δαχρύω 「涙に暮れている」、χεχημασ < χαμνῶ 「くたくたになっている」、χεχηνώς < χάσχω 「口をぽかんと開けている」)③身体的位置を表すもの(例えば ἔσθηκε < ἵστημι 「立っている」、τέταται < τέινω 「横になっている」、χατερήριπε < χατερείπω 「くずおれる」)、④音声を表すもの(例えば λεληχώς < λάσχω 「高く鋭く鳴く」、βέβρυχε < βρύχω 「咆哮する」)⑤その他状態を表すもの、(例えば ἔοικε, pf.tantum 「似ている」、τέτνηκε < τνήσχω 「死んでいる」)などを列挙している [4, t.II, p.197 & seqq.]。

その上でシャントレーヌは次のように述べ、完了形が当初結果の意義を持つていなかったことを強調している (op.cit., t.II p.431.)。

中動相の完了形はホメーロスにおいて、能動の完了形よりもより頻繁に見られる。この事実はこの語幹がホメーロスの場合未だ状態の意味しか持たず、結果の意義を持っていなかったことによって説明できる。

## (2) 過去完了

§51 完了形に関しては、初原的には現在と過去という時制の違いが存在していなかったというのが多くの研究者の見解であると思われる。ヤサーノフは

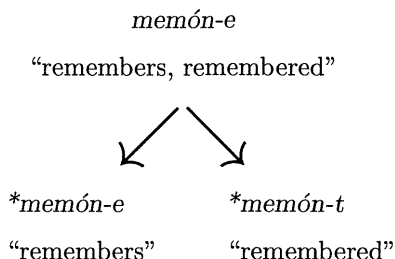
<sup>10</sup>Le sens original du parfait est d'exprimer un état qui se situe dans le présent, ou, du moins dans l'actuel. Comme certaines notions s'accrochent bien du sens d'état il y a des racines qui ont fourni des parfaits plus volontiers que d'autres.

これについて次のように述べている。

過去完了の単数は、明らかに本来の完了と同じく O 階梯を持っている。これは共時的な観点からすれば完了形の語尾 *\*-h<sub>2</sub>e*, *\*-th<sub>2</sub>e*, *\*-e* を二次語尾 *\*-m*, *\*-s*, *t* に取り替えることによって派生される。

これまで多くの学者たちが得た殆ど必然的な推論は、祖語の歴史を遡るある時期に、完了形の前身となるものが、時制に関係なく、現在及び過去の状態の意味を、同じように表現していたというものである。

三人称単数の *\*memon-e* という形は、恐らくかつては「彼(女)は覚えている」と「彼(女)は覚えていた」の両方を意味していた。その後完了形において現在と過去の違いを明らかにすることが必要であるか望ましいということになるに及んで、特に完了形語尾を示す「二次的」な組を作る爲に、能動の二次語尾が完了形に導入された。



§52 ヤサーノフは更に三人称複数形に関して、一部重複するが、次のように述べる。

祖語が分裂する前のある時点で完了形の初原的なパラダイムは二つの構造的圧力の下に形式の分裂を蒙った。現在及び過去の状態の意義を区別する必要、ならびに零階梯を特に「弱い」母音として特化するという、言語全体に亘る圧力である。

単数形には第一のファクターのみが作用した。その結果能動二次語尾による過去完了一人称 — 三人称 *\*memó-m*, *\*-s*, *\*-t* が作られた。

一方複数三人称には両方の力が加えられた。原則としては二つ以上の結果が可能だったろう。例えば *\*memém* は先ず「能動」の過去完了 *\*memén-nt* を生みだし、後に — おそらくはかなり後になってであるが — 新たに分化した完了と過去完了とは、それぞれ零階梯の *\*memn-érs* と *memn-ént* に作り替えられた。

しかし実際には最初に作られたのは母音交替の規則による相関関係 apophonic correlation であった。即ち最初は明らかに *\*memén-rs* と並んで存在する新しいヴァリエントとして *\*memn-érs* が作られた。その結果はクリロヴィチのいう「類推の第四法則」の典型的な環境であった。即ち古い形の分布を司るこの有名な法則

に従って、新しい \*memnérs が、分化以前の完全階梯を持った形の第一の価値 — 即ち状態動詞現在という意義に特化し、一方元来の \*memén-rs は状態動詞過去という、「二次的な」価値を取ることによって生き残った。能動二次語尾 \*-(e)nt は必要のないものとして消滅した [11, pp.40-43]。

このようなヤサーノフの説は極めて精緻に涉ったものであるが、本来過去の状態にも現在の状態にも変わりなく用いられていた完了形に対して、何故「完了形において現在と過去の違いを明らかにすることが必要であるか望ましい」といった「圧力」がかかったのかという、最も肝心なことについては、何らの説明もない。畢竟 wise after event の域を出るものとはいえないであろう。

§53 これまで余り意識されてはいないように見受けられるが、完了形が未だ状態を表し、例えば「坐っている」のように行為の結果乃至結果によって招来せられる状態を表してはいなかった時代には、「立っている状態」から「坐っている状態」への変化そのものは問題にされないのが普通だと思われる。上で述べた δέδῃα「燃えている」、πέπηγα「突き出ている、聳えている」等はその典型的なものだと思われる。

即ちこれらの完了形によって表される状態への移行そのものについては一般に目睹性がないといえることができる。してみれば本来の完了形は状態の変化についての目睹性を欠くというのがその基本的な性格であったと考えることはできないであろうか。この段階に関しては、完了形は状態動詞の現在形と本質的に異なることはないと考えてもよいであろう。

その後完了形が行為の結果としての状態を表すようになると、目睹性の欠如は完了形の特徴的な性格であることを止め、過去の事実を表すことができるようになると考えられる。即ち純論理的に考えれば、現在の状態の開始についての目睹性は、必然的に過去の事件を問題にすることにならざるを得ない。即ち目睹性を獲得することによって完了形は自己の意義のうちに過去をも含むことになると思われる。もしこの目睹性の欠如が完了形過去に一部引き継がれていくことになるとすれば、即ち逆に言えば過去完了形はこの目睹性の欠如を引き継ぐことによって、その存在の意味を獲得するのではないかと考えられて来るのである。これが当を得たものかどうかは今後事実即して検証する必要がある

と思われる。

再びもしそうとすれば、例えばロシア語において過去完了形は消滅したが、目  
睹性の欠如を表す場合にのみ、*жил был* 例えば *жил был король когда-то*  
「昔々、王様がおったとさ」という形で残ったのではないかと考えられる。

この考えがもし正しいとすれば、完了形は過去完了形と共に、かつての二時  
称体系において汎時的アオリストに対立する過去形を引き継いだものだと考え  
ることができるのではあるまいか。再びもしそうとすれば、印欧諸語はそれぞ  
れに複雑な時制組織を作り上げてきたが、その根底には曾ての二時称体系の枠  
が暗黙のうちに継承されているとすることができるのではないだろうか。

(2006年9月14日脱稿)

関係文献

- [1] Československá akademie věd 79  
*Русская грамматика*, 1-2, Praha 1979.
- [2] N. van Block  
Les thèmes verbaux à redoublement du hittite et le verbe indo-européen,  
*RHA* 1964, t.XXII, fasc. 75.
- [3] Karl Brugmann  
*Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen*, Bd.II, 2 Aufl. T.2. Straßburg 1911, T.3 1913, T.2 1916.
- [4] Pierre Chantraine  
*Grammaire Homérique*, Paris, t.1. Phonétique et morphologie 1958, t.2. Syntaxe 1963.
- [5] Pierre Chantraine  
*Morphologie historique du grec*, 2-me éd., Paris 1967.
- [6] W. Cowgill  
More evidence for Indo-Hittite: the Tense-Aspect system, *Proceedings of the Eleventh International Congress of Linguists*, Bologna 1975, pp.557-570.
- [7] W. Cowgill  
Anatolian  $\bar{h}$ i-Conjugation and Indo-European perfect: Instalment II.  
*HI*, Bologna 1979, pp.557-570.
- [8] H. Eichner  
Vorgeschichte des hethitischen Verbalsystems, *FW* 1975, p.75.
- [9] Jan Gonda  
*The character of indo-european moods*, Wiesbaden 1956.
- [10] Hermann Hirt  
*Handbuch des Urgermanischen*, Teil I, Heidelberg 1931, Teil II, Heidelberg 1934.

- [11] Jay H. Jasanoff  
*Hittite and the Indo-European Verb*, Oxford University Press 2003.
- [12] Paul Kretschmer  
*Objektive Konjugation im Indogermanischen*, Wien 1947.
- [13] Heinz Kronasser  
*Die Nasalpräsentia und Kretschmers Objektive Konjugation im Indogermanischen*, Wien 1960.
- [14] Frederik Kortlandt  
Holger Pedersen's *Études lituaniennes* revisited, *Baltistica VI Priedas* 2005. (Internet)
- [15] Jerzy Kryłowicz  
Injonctif et subjonctif dans les Gathas de l'Avesta, *Rocznik Orientalistyczny* III, 1925/7.
- [16] Jerzy Kryłowicz  
Les désinences moyennes de l'indo-européen et du hittite. *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, t.30 fasc. i, p.14.
- [17] Jerzy Kryłowicz  
*L'apophonie en indo-européen*, Wrocław 1955.
- [18] Antoine Meillet  
*Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris 1922.
- [19] Louis Renou  
Les formes dites d'injonctif dans le R̥gveda, *Étrennes de linguistique offertes par quelques amis à E. Benveniste*. Paris 1928.
- [20] E. Risch  
Zur Entstehung des hethitischen Verbalparadigmas, *FW*, 1975, pp.71-103.

- [21] Bernhardt Rozenkranz  
Die Hethitische  $\text{hi}$ -Konjugation. *Jahrbuch für kleinasiatische Forschung*,  
Bd.II, Heft 3, 1953. pp.339-349.
- [22] Bernhardt Rozenkranz  
Die Hethitische  $\text{hi}$ -Konjugation und das idg. Perfekt, KZ 1958, Bd.75,  
Heft 3/4, 1953. pp.215-221.
- [23] Herbert Weir Smyth  
*Greek Grammar*, Harvard University Press, 1971.
- [24] E. Schwyzer  
*Griechische Grammatik*, Bd. 1, München 1939.
- [25] Oswald J. L. Szemerényi  
*Introduction to Indo-European Linguistics*, Clarendon Press Oxford  
1996, Translated from *Einführung in die vergleichende Sprachwis-*  
*senschaft*, 4th ed., 1999.
- [26] Oswald Szemerényi  
*Richtungen der modernen Sprachwissenschaft*, T.I, Heidelberg 1971.
- [27] Calvert Watkins  
*Indogermanische Grammatik*, Bd.III/1, Heidelberg 1969.
- [28] АН СССР  
*Русская грамматика*, 1-2, М. 1980.
- [29] Викторина Николаевна Ярцева, red.  
*Лингвистический энциклопедический словарь*, М. 1990.
- [30] Российская АН, Институт языкознания  
*Языки российской федерации и соседних государств, Энциклопедия*  
*1-3, Москва 2005.*
- [31] Екатерина Николаевна Мячина, red.  
*Суахили-русский словарь*, Москва 1987.

- [32] Владимир Михайлович Алпатов  
*История лингвистических учений*, Москва 1998.
- [33] Томас Барроу  
*Санскрит*, Москва 1976.
- [34] Леон Арсеньевич Булаховский  
*Исторический комментарий к русскому литературному языку*,  
пятое, дополненное и переработанное. Киев 1958, Rep. Leipzig  
1974.
- [35] Федор Иванович Буслаев  
*Историческая грамматика русского языка*, М. 1950, Rep. pub. 5 ed.  
(1881).
- [36] Тамаз Валерианович Гамкрелидзе, Вячеслав Всеволодович  
Иванов  
*Индоевропейский язык и индоевропейцы*, I-II, Тбилиси, 1984. Rep.  
pub. 5 ed. (1881).
- [37] Агния Васильевна Десницкая  
*Сравнительное языкознание и история языков*, Л. 1984.
- [38] Вячеслав Всеславич Иванов  
*Славянский, балтийский и раннебалканский глагол, Индо-  
европейские истоки*, М. 1981.
- [39] Георгий Александрович Климов  
*Очерк общей теории эргативности*, М. 1973.
- [40] Георгий Александрович Климов  
*Типология языков активного строя*, М. 1977.
- [41] Георгий Александрович Климов  
*Типологические исследования в СССР, 20-40-е годы*, М. 1981.

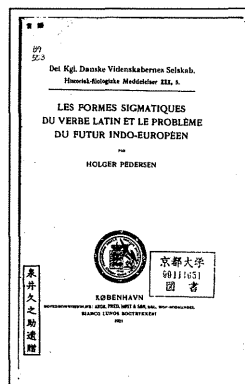
- [42] Георгий Александрович Климов  
*Принципы контенсивной типологии*, М. 1983.
- [43] Георгий Александрович Климов  
*Введение в кавказское языкознание*, М. 1986.
- [44] Георгий Александрович Климов  
*Основы лингвистической компаративистики*, М. 1990.
- [45] Иван Иванович Мещанинов (1883-1967)  
*Глагол*, М.-Л. 1949, Переиздан. Л. 1982.
- [46] Илья Аронович Перельмутер  
*Общеиндоевропейский и греческий глагол, Видо-временные и залоговые категории*, АН СССР Ленинград 1977.
- [47] Иосиф Моисеевич Тронский  
*Очерки из истории латинского языка*, АН СССР Л.-М. 1953.
- [48] Иосиф Моисеевич Тронский  
*Историческая грамматика латинского языка*, Москва 1960.
- [49] Иосиф Моисеевич Тронский  
*Обще-индоевропейское языковое состояние*, Ленинград 1967.
- [50] Пиер Шантрэн  
*Историческая морфология греческого языка*, Перевод Я.М.Боровского, Москва 2001.
- [51] Анаторий Юдакин  
*Ведущие языковеды мира, Энциклопедия*, Москва 2000.
- [52] 泉井久之助  
『言語研究とフンボルト』弘文堂 1976 (昭和 51).
- [53] 石田修一訳  
『G. A. クリモフ, 新しい言語類型学, 活格構造言語とは何か』三省堂 1999.

- [54] フンボルト  
亀山健吉『フンボルト 文人・政治家・言語学者』中公新書 525, 1978.
- [55] フンボルト  
亀山健吉訳『ヴィルヘルム・フォン・フンボルト 言語と精神 カヴィ語研究序説』法政大学出版局 1984.
- [56] 村山七郎  
『ロモノーソフ以前の二つのロシア文法』九州大学文学部言語学研究室 1971.
- [57] 榊亮三郎  
『解説梵語学』種智院大学出版部 初版明治 40 年, 第三版昭和 25 年.
- [58] ソシュール  
『一般言語学講義』小林英夫訳 岩波書店 1940.
- [59] 細江逸記  
『動詞時制の研究』泰文堂 初版 1932, 第八版 1955.
- [60] 細江逸記  
『動詞叙法の研究【新版】』篠崎書林 1974.
- [61] 山口 巖  
『人とことば — その関わりと研究の歩み』鳥取環境大学講義ノート 非売品 2004.
- [62] 山口 巖  
『ロシア文法の周辺 — 一般言語学への招待』古代ロシア研究特別号 日本古代ロシア研究会 2005.
- [63] 山口 巖  
言語における認識の機能と「客観的現実」の構築について、『鳥取環境大学紀要』No.3, pp-21-29, 2005.

## 泉井先生手沢本

## 資料

本文を書いているときに、シグマをもつ動詞の問題についての、ペデルセンの論文を読む機会を得た。これは京大文学部図書室所蔵のものであって、右図に見られるように、恩師泉井久之助博士の遺贈にかかるものである。その中扉の裏側に鉛筆で書かれた覚え書きがあった。末尾に掲げたのがこれであるが、筆跡は紛れもなく先生御自身のものと思われる。ペデルセンのこの論文が公刊されたのは1921年であるから、先生がこの論文に接せられたのはそれ以後、おそらくはそれからさほどへだたった時期ではなかったろうと思われる。以下に掲げたのはその内容である。



先生はの中で、ギリシア語の動詞組織に関して、印欧祖語の「非過去」 *verbe non passé* と「過去」の二つの時制が、どのようにして古代ギリシア語の時制に発達したかについて可能な二つのあり方が存在すると考えておられたようである。見にくいと思われるので、仮に書き直してみれば、大凡次のようになるかと思われる。

## (I)

|                                 | imperfectif | perfectif                                                                            |
|---------------------------------|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| temps non<br>passe<br>(présent) | θνήσχω      | τέτνηχα                                                                              |
| temps passé                     | ἔθνησxon    | (ἔτεθνήχειν (état qui est(?) résulté)<br>ἔθανον)<br>↓<br>[Pedersen ヲ全て passé の中ニ入レル] |

## (II)

又ハ次ノ如キが至當か

|                      | imperfectif | perfectif                   |
|----------------------|-------------|-----------------------------|
|                      |             | résultat : perfectif, terme |
| temps non passé      | θνήσχω      | τέθνηχα :<br>(一種の現在):       |
| temps (sc. passé(?)) | ἔθνησxon    | ἔτεθνήχειν :<br>} ἔθανον    |

この中にははっきり読み取れない箇所があり疑問符を付けておいたが、全体の意図は明らかである。これを見る限り先生は既にこの問題について、我々が現在到達したのと殆ど同じ体系の可能性を考えておられたことが、察せられる。この書が刊行されたのは1921年のことであることを考えれば、その比類のない先見性には、眞に驚嘆を禁じ得ない。先生の学恩を偲びつつここに一筆誌させておきたいと思う次第である。

## 泉井先生のメモ

|                            |             |                                                |
|----------------------------|-------------|------------------------------------------------|
| (I)                        |             |                                                |
|                            | imperfectly | perfectly                                      |
| temps non passé (present)  | ὄντων       | τέοντων                                        |
| temps passé                | ἔοντων      | ἱερόντων (état organique résultant)<br>ἔσαντων |
| [Perfection → passé a φαν] |             |                                                |
| (II) 又、2つ、如左に分類            |             |                                                |
|                            | imperfectly | perfectly<br>résultant                         |
| temps non passé            | ὄντων       | τέοντων<br>, (-1つ前の状態)                         |
| temps                      | ἔοντων      | ἱερόντων<br>ἔσαντων                            |